84-22

世界歴史譚 第七編

漢高祖目次

第一　緒言……一
第二　壯年の高祖……二
第三　群雄の蜂起……九
第四　秦の滅亡……一五
第五　鴻門の會……二五
第六　項羽の專横……三九
第七　漢王の東嚮……四二
第八　漢楚の爭覇……五三
第九　漢楚齊の鼎立……六〇
第十　項羽の敗死……六九

第十一　天下一統……八二
第十二　高祖の政治……八八
其一　諸侯王の淘汰　其二　禮儀文學
其三　首都の經營　其四　邊境　其五　後圖崩御
第十三　高祖の人物……一二六
附錄　其一　其二　其三　其四　其五

漢高祖目次終

世界歷史譚
第七編

漢高祖

文學士　三浦菊太郎著
北蓮藏畫

一　緒言

支那四百餘州の天下は我國の萬世一系の天皇之を統治し給ひ、天壤と共に無窮なるとは異りて、帝者常なく、力あるものは興り、德なきものは亡び、終に王公の種あることなく、昨日の一布衣は、今日萬歲聲裡に黃袍を被むること殆んど珍とせず、故を以て國を爲すもの久しきを保つ能はず、短きは數十年、長きも數百年を出てず、三千年の古帝堯起りてより今日に至るまで、國號の

變すること十有餘の多きに及べり、而して我國孝元天皇の御代より、垂仁天皇の御代に至るまで、二百二十餘年の間は、彼にありては漢の世と云ひて、其創業の主を高祖と云ふ、

高祖は元門地なく、權勢なく、草莽より起り風雲に乘じ、其智と德とを以て天下を掌握したりし一偉人にして、其經歴と人物とは、傳ふに足るべきもの甚だ少なからず、由て今其幼時より筆を起して其概畧を記さんとす、

二　壯年の高祖

今を去ること二千百餘年前我孝靈天皇の即位四十八年に支那國淮河の陰、沛の豐邑(今安徽省にあり)に一兒の呱々の聲を擧げたるあり、父を劉執嘉と云ふ、當時支那は戰國の末に當りて、秦

の始皇父莊襄王の後を嗣ぎ、前代の餘威大にして國富み兵强く、漸く將に天下を併呑せんとするの勢ありて、諸國惴々として之を畏れ、或は縱を說き或は衡を唱へ、兵馬倥偬、劍戟旗鼓日に動き、君王上に憂ひ、四民下に安んぜざるの時なりしかば、一僻邑の劉某が擧げたる赤子の、隆準にして龍顏、左股に七十二の黑子ありたりとも、何人か又其奇を傳ふるの遑あるべきや、

隆準龍顏の兒は名を邦、字を季と云ひ、長ずるに及び仁にして人を愛し、施を好み、終に家人の生産を以て事となさず、其意常に豁如たり、年壯なるに及び、吏に補せられて泗水の亭長となる、

亭長たる劉邦は、嘗て家に在りて生産を事とせざりし劉邦と異る所なく盡く同僚を輕侮し、酒色を好みて放逸至らざるなし、此頃豐邑の村端に王媼武負とて二家の旗亭あり、劉邦先づ王媼

の許に至り連りに酒杯を傾むけ、醉へば則はち臥し、醒めて更に武負の家に飲むこと前の如くにして、共に其價を賠ふことなし、是を以て爛醉耽湎の一懶夫は、此處に彼處に人は見るを得たれども、泗水の亭長の治績としては、何人も嘗て之を耳にすること能はざりき、亭の長は極めて卑職なり、劉邦の才果たして此の卑職にだも足らざるか、將た職太だ小にして劉邦の器を容るゝ能はざるか、

劉邦最も大言を好み、嘗て年而立の頃咸陽に在り、時に始皇帝既に六國を滅し、天下を分ちて三十六郡となし、全國の兵を收めて之を銷し、鍾鐻金人十二を爲り、以爲らく天下是より安しと、世の豪富を咸陽に徙し、大に宮室を修め、一歩宮門を出づるや、鹵簿整々として前仗後從其數幾千人、其威權の赫々たること前古未

だ嘗て有らざる所にして人々皇帝の名を口にするだも猶ほ之を憚かる程なりき、一日劉邦許るされて始皇帝を道に拜することあり、其威儀の堂々たるを見則ち喟然として太息して曰く、嗟乎大丈夫たるもの當に此の如くなるべしと、傳へ聞くもの只其言の大なるを嗤ふのみなりき、

當時汝南單父の人に、姓を呂、名を文、字を叔平と云ひて、甚だ令聞ある人ありしが、故ありて其鄉里を去り、沛の令に依り、遂に家人を擧げて玆に居住せしかば、人々其名を聞き、刺を通じて見んと欲するもの甚だ多し、沛邑の主吏蕭何、此れが應接に當り、殆んど其煩に堪へず、由て令を定めて曰く、贄千錢以上は堂に上るべく、以下は堂下に坐せよと、劉邦素より蕭等を輕視す、由て紿きて曰く、我賀は萬錢なりと、直に堂に上りて上座に坐へられ、更に恥

づる色なし、何驚て曰く、劉秀固より大言多くして成事少しと、然れども呂文は、何等か此大言多くして、成事少き蕩兒に見る所あ

りけん、一見して大に之を尊敬し、酒肴を備へて之を遇すること甚だ厚く、遂に愛女を以て之れに娶し、更に其の妻の慍と、沛人の嘲とを意とせざりき、

時に酒を被むり、時に大言壯語し、一令聞なき劉邦は、久しく亭長の職に安んぜしが、遂には其職を衍去るの止むを得ざるに至れり、一日縣の爲めに囚徒を酈山に送ることありしが、例の放逸の氣象として之を監するとの寛なりけむ、徒多くは道より逃亡せり、邦以爲らく斯の如くならば、酈山に至る頃ひ遂に一人の殘るものなからんと、則ち其途豐西の澤中に至り、酒を招き、盡く徒の縛を解きて曰く、公等皆去れ、吾も亦此より逝かんと、徒中の壯士幾人か其胸襟の濶きに服し生死共に從はんとを乞ふものあり、邦亦甚だ拒まず、相伴ふて其鄉に歸り、官咎を恐れて所在に隱匿し、山澤巖石の間、又席の溫あるとなし、妻呂氏、嘗て父の誡あり、又已も邦に服する所ありしにや、常に邦の居る所を求め、流離の間又決して負くとあらざりき、

三　群雄の蠭起

周其政を失ひてより諸侯呑噬を事とし、天下一日の安なし、是を春秋時代と云ふ、既にして强は弱を併せ、大は小を合して我朝孝安天皇の頃には、齊、趙、韓、魏、楚、燕、秦、等數國となれり、此を戰國時代と云ふ、此内秦は北方に僻在し、文化猶淺く、習俗未だ華ならざりしかば、諸國遇するに夷狄を以てし中國の會盟に加へざりき、左はれ秦人は性堅忍にして、久しく天與の富源によりて、其實力を養ひしが、孝公の時商鞅を用ひ、其手腕に依賴し政法を一變してより、法令峻嚴にして道遺を拾はず、山に盜賊なく、家給し人足り、民公戰に勇にして私鬪に怯し、鄉邑大に治まり、國勢益富强なり、是に於て中國諸侯漸く之を憚かり、目するに北方の恠物を以

てせしが、昭襄王に至り此惟物は徐に其身を起し、屢々中原に向ひて其妖氛を吐き、始皇に及びては或は兵力により、或は機智を以て遂に支那全土を平げ、郡縣の制を以て秦の天下を子孫萬世に傳へんとせり、然れども其政苛酷に失して以て民心を得る能はず、僅に威力を以て一世を壓するを得たりしが、威力を以て天下に臨むは始皇にして始めて之を能くすべく、始皇ならざるものは焉ぞ久しく其位に安んずるを得べき、加ふるに天下の人皆其國を亡ひ、其産を奪はれたるの恨と、華として夷に服するの恥羞となきはなく、是等怨と怒と恥とは早晩何處にか其破裂口を得て大に爆發せざるを得ざるなり、始皇崩じて二世皇帝位に即く、而して其人素より庸劣、皇帝の器にあらず、宦官趙高事を用ひ政日に非にして、世人漸く秦を侮るの心あり、

時に澤州陽城の人、陳勝、字は涉なるものあり、身久しく隴圃の間にありしが、一日慨然として大に感ずる所あり、即ち王侯將相寧ぞ種あらんや、と絶叫して兵を起し、吳廣、張耳、陳餘等豪傑の士を得て勢威大に振ひ、自立して王となる、諸郡縣秦の法に苦しむもの、爭て吏を殺して以て涉に應ず、此時劉邦は既に亭長の職を失ひ、四方に流寓せしが、來り從ふもの漸く多く、既に數百人に及べり、即はち陳涉に應ぜんとし先づ沛の城を圍む、沛の父老令を殺して邦を迎へ、沛を治めんとを請ふ、邦故らに辭して曰く、天下將に擾れ諸侯竝び起る、今將を置き其人を得ず、一朝破敗せば肝腦地に塗れ、又立つべきなからん、吾敢て自から愛するに非るも、父兄子弟を完ふするの器に非ざるを奈何せん、と父老數々之を請ふに及び始めて之を許し、自から沛公と稱し、黃帝を祠り、蚩尤

を沛の庭に祭り、鼓に釁り、旗幟皆赤を用ひ、以て大に兵威を張り、子弟を收めて三千人を得たり、嘗て王媼武負の家に醉ひ、或は嚢中一物なくして賀錢萬と稱し、只空言成事少きを以て聞えし人は今や飜然性行を異にし、寛厚人を容れ、遂に又躁擧輕動せず、世をして其別人ならざるやを怪ましむるに至れり、而して其部下に蕭何あり、曹參あり、樊噲あり、皆少年の俊豪にして、或は財政の才を以て、或は經世の術を以て、或は扛鼎の勇を以て沛公を輔け、英氣勃々、偏に風雲を待ちて各手腕を試みんとす、

二世皇帝東方騷擾するを聞き、謁者に問ふに事實を以てす、答へて曰く、皆是れ群盜にして猶鼠竊狗盜の類、以て憂ふるに足らざるなりと、而して此憂ふるに足らざる鼠竊狗盜は、數に於ても將た力に於ても、次第に加はりて、武臣は趙に、田儋は齊に、韓廣は

燕に、魏咎は魏に、各其王と稱し、吳に起りたるを項梁及其兄の子項籍となす、皆陳勝を首として秦を亡ぼさずんば止まざらんとす、項梁は楚の將項燕の子にして世々下相に居る、嘗て人を殺し項籍を携へ仇を避けて吳中に在り、籍字は羽、少時書を學びて成らず、去て劍を學びて又成らず、乃ち梁に謂ふて曰く、書は以て姓名を記するを得ば足るべく、劍は一人の敵なり學ぶに足らず、願くは萬人の敵を學ばんと、梁其言を奇とし、籍に兵法を敎ゆ、籍大に喜び略其大意を知りて、又肯へて之を竟へざるなり、軀幹長大膂力人に踰へ、才氣俊敏、吳中子弟の憚かる所なりき、

梁籍二人吳中に在り、名望漸く隆かりしが、陳涉の起るを聞き、又之に應ぜんと欲し、相謀りて會稽の太守を斬りて其印綬を奪ひ、以て府中に示し、籍劍を拔き服せざるものを擊殺すること數十百

人、衆皆慴伏して命を聽く、乃ち吳中の兵を擧げ八千人を得、梁自ら會稽の太守となり、籍を以て裨將となす、

秦二世皇帝の二年、陳勝其御の爲めに殺さる、其部下の將召平、陳勝の命を矯め、梁を拜して楚王の上柱國となして曰く、江東已に定まる、宜しく急に兵を引き西の方秦を擊つべしと、項梁乃ち八千人を以て、揚子江を渡りて西し、陳嬰、黥布等諸雄の兵を合せ凡そ七萬人を得、進みて襄城を拔く、既にして陳涉の死を聞き大に諸豪傑を薛に會し、後事を議す、沛公亦來り會す、時に居鄛の人范增なるものあり、年七十奇計を好む、往て項梁に說て曰く、夫れ秦六國を滅するとき楚最も罪なし、懷王秦に入て反らざるや楚人之を憐み、今に至りて渝るなし、故を以て楚南公が曰く、「楚三戶と雖ども秦を亡ぼすものは必ず楚ならん」と、今陳勝事を首め、楚の

後を立てずして自立せり、其勢素より長きを得ざるなり、今は君江東に起る、楚の蠭起の將皆爭て君に附くものは、君世々楚の將として必ず能く復た楚の後を立てんを思ふてなり、と梁其言を納れ、楚の懷王の孫、心を牧人の中に得て立て懷王とし、盱臺に都せしめ、以て民望に從ふ、是に於て沛公項羽以下所在の豪傑曩に陳勝に從ひしもの、皆懷王の幕下に屬す、時に沛公年三十六項羽年二十五、

四　秦の滅亡

項梁武信君となり、懷王を助けて諸將に令し、先づ沛公項羽に命じて城陽を攻めしむ、二人之を陷るゝの後、秦將章邯の軍を濮陽の東に破り、更に南して定陶を圍み、又秦軍を破ること二回、兵

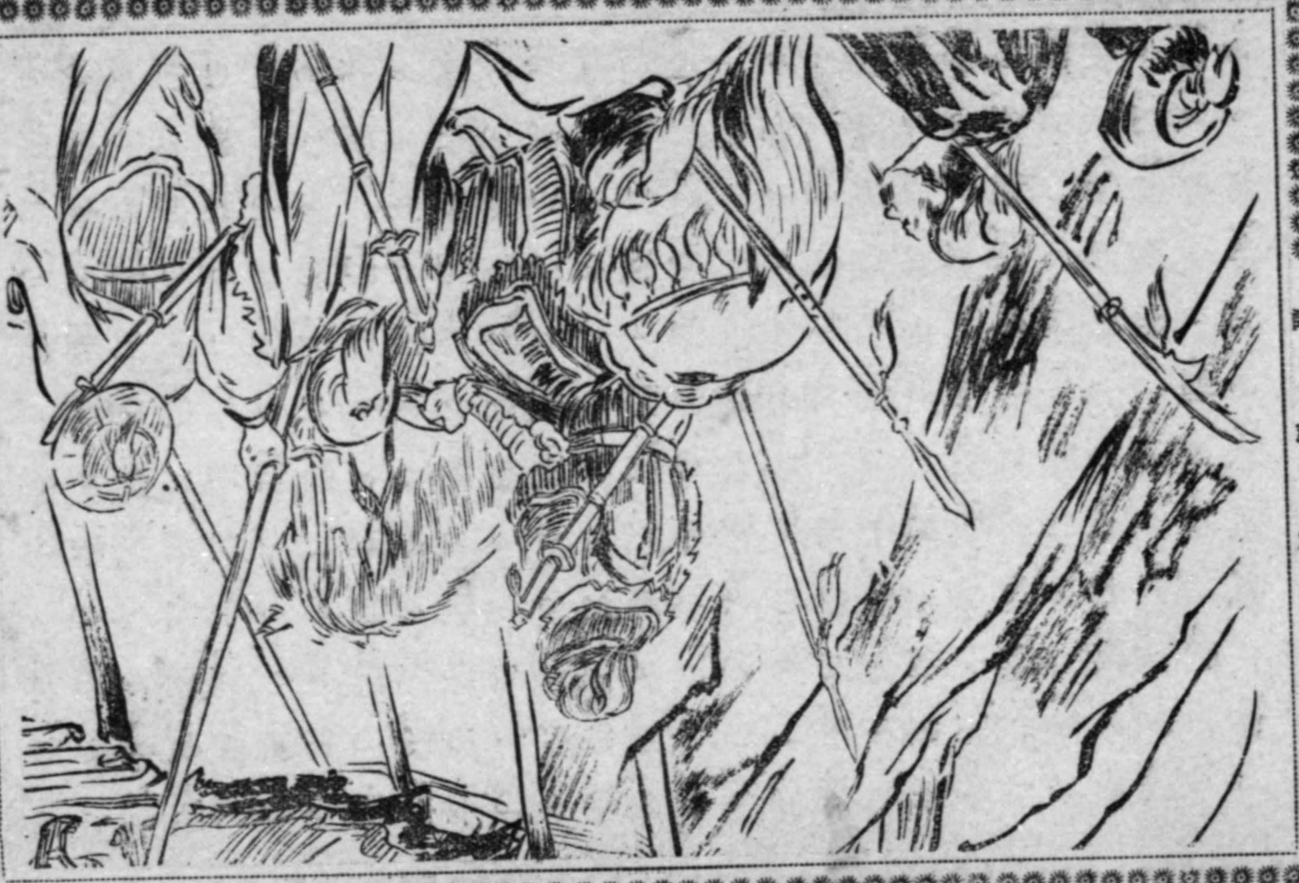
威益振ふ、是に於て項梁漸く秦を輕侮するの色あり、遂に又人の諫を聽かず、既にして章邯大に援兵を得て、楚軍を定陶に擊て大に之を破り、遂に項梁を殺す、征秦軍は先きに其首陳勝を失ひ、今又柱石なる項梁を失ひて勢頗ぶる危ふく、倒秦の事或は將に成らざらんとす、沛公項羽相與に謀て曰く、今梁死して士卒恐るゝの色あり、如かず呂臣の軍と共に東せんにはと、則はち兵を引き、呂臣は彭城の東に、項羽は彭城の西に、沛公は碭に軍し、各其營を守りて出でず、章邯既に梁を擊殺し、以爲らく楚の地憂ふるに足らずと、仍て去て黃河を横絶して趙を擊つ、時に趙歇王となり、陳餘、張耳之に屬せしが遂に秦に擊破せられ、奔りて鉅鹿城に入る、章邯其將王離、涉閒二人を遣はして、鉅鹿城を圍ましめ、自ら其南に軍して後援をなす、

懷王事の急なるを見、盱臺を去り自ら彭城に赴き項羽呂臣の軍を幷せ、呂臣を司徒とし、沛公を碭郡の長とし、更に宋義の戰に長ずるを聞き、召致して上將軍とし、項羽を次將とし、范增を末將となし、趙を援はしむ、諸將義を號して卿子冠軍と云ふ、義進みて安陽に至り掩留すること四十餘日、時恰も天大に寒く、士卒甚だ困しみ、加ふるに糧漸く將に乏しからんとす、而して義更に鬪ふの志なし、項羽以爲らく、曠日彌久徒に兵氣を沮喪せしめ、而かも新造の趙國旦暮に破れんとす、趙若し亡びば我軍豈に全きを得んや、と、即ち心を決し、晨に帳中に進みて上將軍宋義を斬り、其頭を提げ出でゝ揚言して曰く、宋義齊と謀て楚に反す、楚王羽をして之を誅せしむと、諸將戰慄敢て云々するものなく、皆羽を推して上將軍となす、羽輒ち全軍を以て漳水を渡り、船を沈め、釜甑を破り、

僅かに三日の糧を持して、士卒に必死を示し、大に秦軍を打つ、楚兵呼號天を動かし、一以て十に當り、大に秦を破り、王離を虜にし、涉間をして自刎せしむ、諸將是より楚兵の强を恐れ、羽の之を召すや皆膝行して前み、敢て仰ぎ見るものなし、章邯功なくして誅に遇はんことを恐れ、降を羽に乞ふ、羽之を許し拜して雍王となし、長史欣を上將軍となす、既にして秦の降兵諸將の兵と和せず、間間反せんとするものあるを聞き夜謀りて之を擊て、秦卒二十萬人を盡く新安城の西に阬にし行々地を略し、正に函谷關に近かんとす、是より先き宋義兵に將として趙を援ふや、懷王諸將に約して曰く、先づ入て關中を定むるものは之に王とせんと、時に秦軍猶强盛にして諸將多くは之を憚かり、敢て行くを請ふものなし、羽獨り項籍の死を憤り、奮て其任に當らんとす、諸將懷王に謂

て曰く、項羽人と爲り慓悍にして猾賊なり、嘗て襄城を攻めて襄城遺類なく、皆之を坑にし、諸々過る所殘滅せざるなし且つ楚數數進取し、而かも其終を全ふせざるもの陳王項梁皆是なり、如かず更に長者を遣はし、仁義を扶持して西し、秦の父兄に告諭せんには、秦の父兄其主に苦しむこと久し矣、今誠に長者を得て、往て侵暴することなくんば、秦以て下すべし、沛公素より寛大の長者なり、以て西せしむべしと、懷王之を可とし、沛公をして西の方關中に向はしむ、

沛公命を受けて、先づ陳勝項梁等の散卒を收め碭を發し、成陽を經、彭越の軍と共に秦軍を打ちて克たず、由て道を轉じて高陽に至り、秦將揚熊と白馬に戰ふて大に之を破ぶり、北平陰を過ぎ雒陽の東に秦と戰ふて又利を失ひ南向し、陽城より進みて南陽郡



を略す、南陽の守宛を守りて降らず、沛公兵を引き直に西せんとす、其臣張良諫めて曰く、公急に秦に入らんと欲すと雖とも秦兵衆多皆嶮に據りて備をなす、今にして宛を下さずんば宛必ず我後を襲はん、彊秦前にあり後方安からず此れ危道なり、と沛公乃はち急に宛を圍み必ず之を屠らんとす南陽の守遂に兵仗糧食を献じて來り降る、沛公今は後顧の憂全く去りたるを以て、乃ち兵を引て西武關に至る、是時に當り王離破れて章邯羽に降り秦兵遂に振はず、秦勢宦趙高責の及ばんことを恐れて二世皇帝を弑し、子嬰を擁立し、沛公の來り迫まるを聞き、使をして云はしめて曰く、卿と約し關中に分ち王たらんと沛公素より其詐を知る、故に使を郤け、張良の策を用ひ盛に兵威を示し、説客酈食其を遣はし、重寶を以て先づ秦將の心を動かし、士卒離心して懈怠する

を待ち、擊て大に之を破り、亡るを追ひ武關より藍田に至り、再び秦軍を破り、勝に乘じ諸侯に先んじて覇上に至る、秦王子嬰力屈し、素車白馬、頭に係るに組を以てし、皇帝の璽符節を封じて軹道の旁に降り、秦遂に亡ぶ、實に我國孝元天皇の即位九年十月にして、後ち沛公國を建て漢と號するに及ひ、此年を以て漢の元年となせり。

曩きに二世皇帝の元年、陳勝事を首めてより、玆に四年、陳勝先に死し、項梁後に倒れ、懷王諸侯を率ゆと雖とも其實權は項羽にあり、今や彊秦既に亡ぶ、天下の覇權誰の手中にか落ちん、勇威を以て云はゞ項羽あり、然れども羽は德望に於ては沛公の上に出で難く、加ふるに羽は秦を破ぶり趙を全ふするの功ありとも、倒秦第一の譽は沛公に外ならざるなり、且つ懷王の約を以てすれば、

沛公將に關中に王たるべくして、必ずしも項羽の下風に立たざるなり、左れば今より後天下勢の趨く所は、項羽にあらざれば、必ず沛公にして、二人の間豈事なくして止むべけんや、

五　鴻門の會

秦王子嬰既に沛公に降る、人或は其殺すべきを云ふあり、沛公許さずして曰く、懷王の我を遣はすものは我寛容なるを以てなり、然るに若し不仁にして子嬰を殺さば、是れ懷王の意に反くものなりと、乃ち之を吏に付し、西して咸陽に入る、秦の宮室頗る壯麗財物婦女を以て數ふべし、沛公喜び留まりて之に居らんとす樊噲之を諫むれども聽かず張良亦諫めて曰く、夫れ秦無道にして驕奢度なく、以て天下を失へり、秦に代はるもの須らく縞素を以て資となすべし、今始めて秦に入り、秦の樂みを樂まば、此れ桀を助けて虐をなすものなり、焉んぞ天下の爲めに、殘賊を除くものと云はん、縱令忠言耳に逆ふものありとも、公願はくは噲の言を聽け、と沛公其言に從ひ還て覇上に軍し、諸縣の父老を會し謂て曰く、父老既に秦の苛法に苦しむこと久しく、誹謗すれば族せられ、偶語すれば棄市せらる、世を治むるもの何んぞ斯の如くなるべけんや、我諸侯と約あり、先づ關中に入るもの則ち之に王たらんと、我當に汝等に王たらんとす、由て盡く秦の法を廢し、只父老と法三章を約せんのみ、曰く人を殺すものは死せん、人を傷け及び盜するものは罪に抵らん、と秦人皆大に喜び、牛酒を具へて軍を犒はんとす、沛公斥けて受けず、秦人益々悅び更に亡國を恨みず、偏に沛公の王たらざるを恐る、時に人あり沛公に說て曰く、秦

は地形彊勝、富天下に倍す、退て以て守るべく進みて以て天下を致すべし、聞く項羽章邯の降を容れ、之を關中に王とすと、羽若し至らば公必ず此地を保つ能はざらん、如かず兵を備へて函谷關を守り以て諸侯を拒がんにはと沛公其言に從ふ、

翌十一月項羽秦卒を阬にするの後、行々地を略して秦を定めんとして函谷關に至り、一舉して秦を滅せんとす、何ぞ圖らん相識の兵の既に關を守るありて、我を遮るあらんとは、是に問ふに曰く、沛公既に關中を定め、吾曹を遣はし是に後より來るものを留めしむと、項羽怒て曰く、誰か敢て我を止むる者ぞ、と即はち命を當陽君黥布に傳へ、討て關を破らしめ、自から進みて戲の西に陣す、人は幾度か死生の間に在り、干戈又幾度か鮮血に染む、一軍の意氣頗ふる昂り、勢殆んど當るべからざるものあり時に沛公の

左司馬曹無傷なるものあり、人をして羽に謂はしめて曰く、沛公自から關中に王たらんとし、子嬰を相とし珍寶を私すと項羽益怒り將に沛公を討たんとす、沛公之を聞き、敵すべからざるを知り、自から往きて鴻門に羽に謝し、僅かに事無きを得たり、

司馬遷鴻門の會を記して曰く、

項羽中略行々略して秦の地を函谷關に定めんとす、兵有り關を守りて入るを得ず、又沛公の已に咸陽を破るを聞く、項羽大に怒り當陽君等をして關を擊たしめ、遂に入りて戲の西に至る、沛公霸上に軍し未だ項羽と相見るを得ず、沛公の左司馬曹無傷人をして項羽に言はしめて曰く、沛公關中に王たらんと欲し、子嬰をして相たらしめ、珍寶盡く之を有つと、項羽大に怒て曰く、旦日士卒を饗し擊て沛公が軍を破らんなり、と

是の時に當り項羽の兵四十萬新豐の鴻門に在り、沛公の兵十萬霸上に在り、范增項羽に說て曰く、沛公山東に居るとき財貨を貪ぼり美姬を好む、今は關に入りて財物取る所なく、婦女幸する所なし、此れ其志小に在らず、吾今人をして其氣を望ましむるに、皆龍虎を爲し五采を成すと云ふ、此天子の氣なり、急に擊て失ふこと勿れと、

楚の左尹項伯は項羽の季父なり素より留侯張良に善し張良此時沛公に從ふ、項伯乃ち夜馳て沛公の軍に之き、私に張良を見て具さに告ぐるに事を以てし、張良と與に俱に去らんと欲す、曰く、從て俱に死すること毋れと張良曰く、臣韓王の爲めに沛公を送る、沛公今事急なり、亡げ去るは不義なり、語らざるべからずと、乃ち入て具に沛公に告ぐ、沛公大に驚て曰く、之を爲

すこと奈何と張良曰く、誰か大王の爲めに此計を爲す者ぞ曰く鮑生我に說て曰く、關を距ぎ諸侯を內るゝこと毋んば秦の地盡く王たるべしと、故に之に聽けり、良曰く料るに大王の士卒、以て項王に當るに足らん乎、沛公默然たり、旣にして曰く、固より如かざるなり、且之を爲すこと奈何、張良曰く、請ふ往て項伯に謂て言へ、沛公敢て項王に背かざるなりと、沛公曰く、君安んぞ項伯と故ある、張良曰く、秦の時臣と游ぶ、項伯人を殺し臣伯を活す、今事の急なるあり、故に幸に來りて良に告ぐ、と沛公曰く、君と少長孰れぞや、良曰く、臣よりも長なり、沛公曰く君我か爲めに呼で入れよ、吾之に兄事するを得んと張良出でゝ項伯を要す、項伯即ち入て沛公に見ゆ、沛公巵酒を奉じて壽を爲し、約して婚姻をなす、曰く吾關に入りて秋毫も敢て近づくる

所あらず、吏民を籍し、府庫を封して將軍を待てり、將を遣はし關を守る所以のものは、他の盜の出入と非常とに備ふるのみ日夜將軍の至るを待つ、豈に敢て反せんや願はくは伯具さに臣の敢て德に倍かざるを言へと、項伯許諾す、沛公に謂て曰く旦日蚤く自から來りて項王に謝せざるべからずと、沛公曰く諾是に於て項伯復た夜去り、軍中に至りて具に沛公が言を項王に報じ因て言て曰く、沛公先づ關中を破らずんば公豈に敢て入らん乎、今人大功ありて而して之を擊つは不義なり、如かず因て善く之を遇せんにはと項王許諾す、

沛公旦日百餘騎を從へ、來りて項王に見ゆ、鴻門に至り謝して曰く、臣將軍と力を戮せて秦を攻む、將軍は河北に戰ひ臣は河南に戰ふ、然れども自から意はざりき能く先づ關に入り、秦を

破りて復た將軍を此に見るを得んとは今は小人の言あり將軍をして臣と郤あらしむ、項王曰く、此沛公が左司馬曹無傷之を言ふなり、然らずんば籍何を以てか此に至らんと、項王即日因て沛公を留めて與に飲す、項王項伯は東嚮して坐し、亞父は南嚮して坐し（亞父とは范增なり）沛公は北嚮して坐し、張良は西嚮して侍す、范增數々項王に目し佩る所の玉玦を擧て、之を示すもの三たび、項王默然として應せず、范增起て出て項莊を召し謂て曰く、君王人と爲り不忍なり、若入り前て壽を爲せ、壽畢らは請ふ劍を以て舞へ、因て沛公を坐に擊て之を殺せ、然らずんば若が屬皆且虜せられんと、莊則ち入て壽を爲す、壽畢りて曰く、君王沛公と飲す、軍中以て樂を爲すことなし、請ふ劍を以て舞はん、項王曰く、諾、項莊劍を拔き起て舞ふ、項伯も亦劍を

拔き起て舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽し、莊擊つことを得ず是に於て張良軍門に至り、樊噲を見る、樊噲が曰く、今日の事何如良か曰く甚だ急なり、今は項莊劍を拔て舞ふ、其意常に沛公に在るなり、噲曰く、此れ迫れり矣臣請ふ入て與に之と命を同じくせんと、噲即ち劍を帶び盾を擁して軍門に入る、交戟の衛士止めて內れざらんと欲す、樊噲其盾を側めて以て衛士を撞て地に仆す、

噲遂に入る、帷を披け西嚮して立ち、目を瞋らして項王を視る頭髮上り指し、目眦盡く裂く、項王劍を按して跽きて曰く、客何爲する者ぞ、張良曰く、沛公の參乘樊噲なるものなり、項王曰く壯士なり、之に巵酒を賜へと則ち斗巵酒を與ふ、噲拜謝して起ち、立ちながら之を飲む、項王曰く、之に彘肩を賜へと則ち一生

彘肩を與ふ、樊噲其盾を地に覆し彘肩を上に加へ、劍を拔き切て之を啗ふ、項王曰く、壯士なり、能く復た飲まん乎、樊噲曰く、臣死だも且つ避けず、巵酒安んぞ辭するに足らん、夫れ秦王虎狼の心あり、人を殺すこと舉すること能はざる如く、人を刑することの勝たざるを恐るゝが如く、天下皆之に叛く、懷王諸將と約して曰く、先づ秦を破りて咸陽に入らん者は之を王とせんと、今沛公先づ秦を破て咸陽に入り、毫毛も敢て近づくる所あらず、宮室を封閉し、還て霸上に軍じ以て大王の來るを待つ、故らに將を遣はして關を守らしむるものは他の盜の出入と非常とに備ふるなり、勞苦して功高きこと此の如くにして、未だ封侯の賞あらず、而かも細說を聽き有功の人を誅せんと欲す、此れ亡秦の續のみ、竊かに大王の爲めに取らざるなりと、項王未だ以

て應ふることあらず曰く、坐せよと、樊噲良に從て坐す坐すること須臾にして沛公起て厠に如く、因て樊噲を招きて出づ、沛公已に出づ、項王都尉陳平をして沛公を召さしむ、沛公曰く今は出づるとき未だ辭せざるなり、之を爲すこと奈何樊噲曰く、大行は細瑾を顧みず、大禮は小讓を辭せず、如今人は方さに刀俎たり我は魚肉たり、何ぞ辭すことを爲さんと、是に於て遂に去り、乃ち張良をして留て謝せしむ良問て曰く大王來るとき何をか操れる、曰く我白璧一雙を持して項王に獻せんと欲し、玉斗一雙を亞父に與へんと欲す其怒に會ひ敢て獻せざりき、公我爲めに之を獻ぜよ、張良曰く、謹て諾す、是の時に當りて項王の軍鴻門の下に在り、沛公の軍霸上に在り、相去ること四十里沛公則ち車騎を置き身を脫して獨り騎し、樊噲夏侯嬰靳

彊、紀信等四人をして劒盾を持して步走せしめ酈山の下より芷陽に道し間行す、沛公張良に謂て曰く、此道より吾軍に至るに十里に過ぎざるのみ我軍中に至るを度り公乃ち入れよと沛公已に去り、間らくにして軍中に至る、張良入て謝して曰く、沛公杯杓に勝へずして辭すること能はず謹で臣良をして白璧一雙を奉じ、再拜して大王の足下に獻じ玉斗一雙再拜して大將軍の足下に奉せしむと、項王曰く、沛公安くにか在る、良曰く、大王之を督過するに意ありと聞き、身を脫して獨り去れり、已に軍に至らん矣、項王則ち璧を受け、之を坐上に置く、亞父玉斗を受け之を地に置き、劒を拔き撞て之を破て曰く、嗟豎子與に謀るに足らず項王の天下を奪はん者は、必ず沛公ならん吾屬之が虜と爲らん矣、

沛公軍に至て、立ろに曹無傷を誅殺す、居ること數日項羽兵を引て、西咸陽を屠り秦の降王子嬰を殺し、秦の宮室を燒く、火三日滅せず、其貨寶婦女を收めて東す、

鴻門の會は、沛公項羽二人相軋るの始にして、僅かに沛公の謹愼と、項羽の不斷とによりて、暫く二人の間事なきを得たりき、此時羽の兵四十萬、百萬と號し、意氣殆んど天下を呑み沛公は力以て羽に當るべからずと雖ども、之を助くるもの張良陳平の智あり、樊噲の勇あり、縱令會見の席上自から許して俎上の鯉魚たりとも、豈に徒らに項羽の刀をして、我一鱗にだも觸るゝを許るさんや、彼勇を以てすれば我智を以てし、彼進めば我退き一呼一吸一動一靜の間黑雲相摩し紫電迸らんとするの概あり、眞に千古の偉觀なりとす、

六　項羽の專横

鴻門の會終りて後項羽兵を引て咸陽に入る、羽素より沛公の寬厚なるに似ざるなり、乃ち降王子嬰を殺し秦の宮室を燒く天下の兵を銷して子孫萬世に傳へんとせし秦も三世にして其後なく、天下の財を以て經營したりし咸陽宮も楚人の一炬の爲めに、火滅せざること三月四方幾里擧げて焦土となり、永く後人をして、殘趾に古を忍ばしむ時に人或は關中四塞の地にして、王者の都とすべきを說くものありたれども羽は秦宮の破滅を見思鄕の念大に起り禁ずる能はずして曰く、富貴にして故鄕に歸らざれば繡を衣て夜行くか如しと、終に久しく關中にあるを願はず、人をして懷王に情を報じ處置奈何を問はしむ、懷王素より事理に通じ、敢て羽の專恣を容るさず、答へて曰く、只約の如くせんの

みこと羽心に快からず、陽に懷王を尊びて義帝と爲し、則はち大に諸將を會して曰く、天下初めて難を發するの時、假りに諸侯の後を立て以て秦に代ふ、然れども身堅を被むり鋭を執り野に暴露すること三年秦を滅し天下を定めたるは皆將相諸君と籍との力なり須らく共に地を分ちて之に王たるべしと、遂に恣に大に諸將を封ず、而して先づ范增の議を用ひ沛公を遠けんと欲し、則はち托言して曰く、秦の遷人皆蜀に居る、故に巴蜀も亦關中の地なりと、沛公を以て巴蜀漢中に王とす、蓋し巴蜀の地道險にして中國と距塞するによりてなり、次に關中を三分し、章邯を雍王とし咸陽以西を與へ、長史欣の嘗て項梁に德あるの故を以て、封じて塞王とし咸陽以東を與へ、都尉董翳の章邯に降を勸めたるの故を以て、封じて翟王となし上郡を與ふ、是より更に諸將を封じ

魏王豹を西魏王として河東を與へ、張耳の臣申陽を河南王とし て雒陽に居らしめ、韓王成をして陽翟に居らしめ、趙將司馬卯を殷王とし河内に居らしめ、趙王歇を代王とし、其相張耳を常山王とし、鯨布を九江王とし、吳芮を衡山王とし、共敖を臨江王とし、燕王韓廣を徙して遼東王とし、燕將臧荼を燕王とし、齊王田市を膠東王とし、齊將田都を齊王とし、田安を齊北王とし、陳餘に南皮の三縣を與へ、梅鋗を十萬戸侯に封ず、是等の人々は皆或は直接に或は間接に羽に功ありし者にして、屢々項羽に反きたる田榮は遂に封ぜらるゝ能はざりき。

項羽既に諸將を封じ、自から立ちて西楚の霸王となり、九郡に王として、彭城に都す、

翌年四月、諸侯皆戲下より罷めて其國に就き、羽亦兵を引て西楚

に還る、然とも義帝其上にあり、縱令實權己の手中にありとも名分よりして頗ふる便ならざるものあり、且つ戯にあるの時約の如くせんとの言ありしを含み密かに之を除かんとするの意あり、先づ之を長沙郴縣に移さんとして曰く、帝は都する所須らく地方千里なるべしと、而して吳芮共敖に密諭して途に江中に之を擊殺せしむ、

項羽の諸將を封ずるや、親を先にして疎を後にせしかば、諸將平ならざるもの多く、久しからずして爭亂燕齊の間に起るに至れり、燕王韓廣遼東に遷るを肯せず、新王臧荼討て之を殺し始めて其國に就くを得たり、齊に於ては田榮封を得ず、且つ齊王膠東に徙され、其將田都の代はりて王となりたるを憤り、齊王を擁し田都を楚に走らし、更に齊王を弑し、自立して齊王となり、且つ彭越

を煽動して項羽に反せしむ、時に陳餘人をして田榮に說かしめて曰く、項羽天下の宰となり、地を分つこと公ならず、且諸侯を善地に封して、故王を醜地に置く、是不義と云ふべきなり、聞くならく大王兵を起して此不義の者を聽さずと願くは我亦大王の助を得て我故王を趙に復し張耳を追はんと田榮許諾し、相與に張耳を破る、耳羽の怒を恐れて漢に降り、趙王其國に復し、陳餘代王となる、

燕齊の擾亂は敢て他國に影響せず、又必ずしも羽を敵とするものに非りき、而して玆に一人の敢て羽と中原鹿を逐ひ、必ず成敗を終局に決せんとする者あり、其人や他に非ず、先に鴻門に抗屈し、巴蜀の僻地に封ぜられたる、漢王劉季其人にてありき、

七　漢王の東嚮

沛公巴蜀漢中の地を得て將に國に就かんとす、則はち張良の計を用ひ、故らに過ぐる所の棧道を、燒き、以て又中原に出づるの心なきを示して項羽を安ぜしめ、而して密かに機を見て天下を計らんとするなり、從ふ所の諸將卒多くは其意を悟らず、皆僻地に赴くを惡み道より亡ぐる者日に數十人なり、時に淮陰の人韓信なる者、先に項梁項羽二人に事へて用ひられず、去て漢に歸せしが又久ふして登用を得ず、由て又道より遁れんとす蕭何素より信の異材を知り、自から逐ふて强て漢王に勸め拜して大將となす、信仍て漢王に謂て曰く、今東嚮して權を天下に爭はんもの豈に項羽にあらずや、漢王曰く然り、曰く、大王自から料るに勇悍仁彊は項羽と孰れぞや漢王默然答へず、やゝ久ふして曰く、如かざる也、曰く、信も亦大王の如かざるを知る、然れども試に項王の

人と爲りを言はんに、項王一たび怒て叱咤すれば千人皆服す、是れ只匹夫の勇にして以て諸將を率ゆるの器に非ず、人を見ること恭敬慈愛、言語姁々、人疾病あれば涕泣して飲食を分つと雖ども是婦人の仁にして有功に封爵するや偏へに其大に過ぐるを恐る、而して上は敢て義帝を弑し、下は則はち民を虐ぐ、是名覇王と雖ども實は天下の心を失ふなり、故に曰く其彊は則はち弱からしむべしと、今大王誠に能く羽の爲す所に反し、天下の武勇に任せば何の所か誅せざらん、功臣を封ずるに天下の城邑を以てすれば何の所か服せざらん、義を擧げ東歸を思ふの士を從へば何の所か散せざらん、且三秦の民、邯、欣、翳三人の羽に降りて子弟を阬にしたるを怨み、痛骨髓に入る、縱令楚を憚かりて暫く忍びて之を王とするとも、心窃かに嘗て大王の秦に入りて秋毫犯す

なく盡く秦の苛法を除きたりし仁慈と高義とを慕はざるはなし、今大王事を擧げ、東せば三秦檄を傳へて定むべく、三秦既に定まらば以て天下に臨む何の難かあらんと、漢王大に喜ひ、直に諸軍を部署し、二年八月兵を陳倉の故道より出し直に秦に向ふ、秦の民果して皆風を望みて來附し、三秦の地忽ち平定し、欣翳等降を乞ふ、漢王尙ほ進み河南を定め、仁政を行ふて民心を收め、更に臨晋を渡りて河内を取り、又南して雒陽に至る、

漢王雒陽に在り、時に新城の三老に董公なる人あり、漢王を遮り說て曰く、德に順ふ者は昌へ德に逆ふ者は亡ぶ、兵出づるに名なし事故に成らず其賊たるを明にすれば敵乃はち服すべし項羽無道にして其主を放弑す、是れ天下の賊なり夫れ仁は勇を以てせず、義は力を以てせず、大王宜しく三軍の衆を率ゐて、之か爲に

に素服して以て諸侯に告げて之を伐つべしと漢王乃ち懷王の爲めに喪に居ること三日使を遣はし諸侯に告げて曰く、天下共に義帝を立て北面して之に事ふ、今項羽義帝を江南に放殺す大逆無道神人共に之を怒る、寡人自ら爲に喪を發し、悉く關内の兵を發し三河の士を收めて、南の方江漢に浮で以て下る願くは諸侯王に從て、楚人にして義帝を殺せる者を擊んと

常に蜚鳴する者は更に大に蜚鳴すること能はず、三年蜚はず鳴かざるものにして、始めて飛びて天を衝くべく、鳴きて人を驚かずべし、漢王由來輕動せず然れども一たび動けば必ず事を成さざるなし、曩に始めて事を擧ぐるや、必ずしも自から求めず、父老の依囑を待ちて沛の子弟を師ゐ、中頃又自から進みて秦に赴か

ず、諸侯の推すにより始めて西嚮し輙ち之を定む、今や深謀遠慮將に羽と天下を爭はんとして咄嗟三秦を略し更に檄して項羽に向ふ、名正しく事順なり、縱令兵勢の少しく楚に如かざるものありとも、意氣滿盛、必ず楚を倒さずんば止まざるの概あり、時に項羽は漢王巴蜀に安居す以て意とするに足らずとなし、大舉齊を攻め田榮を滅し、其弟田横を城陽に圍みて未だ之を降す能はず、漢王諸侯の兵を督し凡五十六萬直に東して楚を伐つと聞き急に兵を分ちて齊の尾擊に備へ、自から精英三萬を師ゐ南の方魯より胡陵に出で、四月更に西して漢軍を彭城の東睢水の上に擊つ、漢軍大に破れ死する者十餘萬睢水爲に流れざるもの久し楚軍急迫漢王を圍むこと三匝時會々大風西北より起り木を折り、石を揚げ天地爲めに晦し漢王由て以て其騎數十と僅かに脫

するを得たり、而して楚軍漢王の父母妻子を獲常に軍中に置て質となせり、諸侯漢の破るゝを見、又反して楚に與するもの多し」猛獅は終に猛獅なり、群羊の及ぶ所に非ず、漢王の軍五十六萬と號するも、楚兵三萬に敵する能はず、初一戰に於て漢王先づ大失敗を獲たり、左はれ一難に遇ふ毎に一倍の勇を加ふるは是れ漢王の漢王たる所以にして、先づ敗卒を碭に收め、騶布を說きて之を降し軍を滎城に進む、時に蕭何亦關中の老弱を發して悉く滎城に至らしむるあり、漢軍再び振ひ楚を討て之に克ち羽をして滎陽以西に進む能はざらしむ、然れども漢の甬道羽の奪ふ所となり、糧食屢々乏し漢王大に困しむ、既にして羽急に兵を進め滎陽を包圍し、必ず漢王を獲んとす、漢王之を患ひ陳平に問ふて曰く、天下紛々たり、何れの時か定まらんと、平曰く、羽の梟雄素恐る

丶に足るものなし、憂ふべきは策士范增あるのみ、王能く數萬の金を散ぜば能く羽をして增を疑はしむべく增疑はれて楚を去らば、羽は謀り易きのみと、漢王則はち平をして事を行はしむ、既にして羽果して增を疑ひ、敢て其言に從て急に滎陽を攻めず、增大に怒て曰く、天下の事大に定まる、君王自から之を爲せ、願はくは骸骨を請て歸るを得んと遂に去りて未だ彭城に至らざるに、疽背に發して死す、

范增已に無し漢王則ち將軍紀信をして詐はりて漢王と稱し東門を出でしめ自から陳平と西門より遁れ宛葉の間に軍し更に北して趙に入り、韓信をして東の方齊に出でしめ、以て羽の力を分たんとす、

八　漢楚の爭覇

韓信命を受け東に向ひ、齊趙を經略し將に楚に向はんとす、羽之を聞き其將龍且をして信を擊たしむ、龍且以爲らく信少ふして食を漂母に亨け、辱を跨下に受く、既に身に資するの策なく、又人を兼るの勇なし、與し易きのみと進みて濰水を夾みて陣す、信夜に乘じ囊砂を以て上流を壅がしめ、旦日兵を進め佯はり敗れ且の軍の追躡するを見乃はち水を決す且の軍溺るゝもの大半且も亦脫する能はず、信由て遂に齊國を經略す、時に彭越亦兵に將として梁の地に往來し楚の糧道を絕ち大に楚を若むるあり是に於て項羽强しと雖ども、兵勢漸く蹙まり、一人を以て三面の敵に當るべからず、由て先づ彭越を擊破し、然る後漢王を謀らん

と欲し、其將曹咎を成皐に留め、漢王の軍を制抑せしめ、誡めて曰

く、慎んで漢と戰ふなかれ、成皐を守る十五日ならば、我必ず梁を定めて將軍と共に漢を討たんと、項羽既に梁に向ふの後、咎等其慎を守る能はず、輕舉漢と戰を交ひて大破し、悉く其地を失ふ羽成皐の敗報を得、途より歸りて又漢王を討たんとす、時に韓信已に齊を破り、人をして漢王に言はしめて曰く、齊楚に近し、若假りに王として之を鎮するなくんば、必ず久しく保つ能はずと、當時漢王親から羽に滎陽に對峙し、信越二人の來援を待つと切なり則はち大に怒り罵り曰はく、吾此に困じ、旦暮若が來りて佐くるを待つ、乃はち自立して王たらんとするは何ぞやと、張良陣平王の足を蹠み耳語して曰く、事急なり只信を王とせよ、然らずんば變あらんと漢王悟る所あり、因て復罵て曰く、大丈夫諸侯を定む即眞王たるのみ、何ぞ假を以て爲さんと、張良を遣はして印綬を

授け信を立てて齊王となす、

項羽廣武に臨み、漢王と相對して未だ降す能はず、時々彭越の爲めに糧道を沮絶せられ、殆んど其煩に堪えず、由て漢王の父太公を高俎の上に置き、漢王に告げて曰はく、急に下らずんば太公を烹んと、漢王曰く、吾項羽と俱に北面して命を懷王に受くるの時約して兄弟たり、吾翁は即ち若が翁なり、必ず若の翁を烹んと欲せば、則ち幸ひに我に一杯の羹を分てと、羽怒りて太公を殺さんとし、項伯の諫むるによりて之を止む、由て更に漢王に謂て曰く天下匈々たること數歲、遂に蒼生を安からしめざるものは、吾等二人の故のみ、願はくは相戰ふて輸贏を決せん、徒らに天下の民を勞ずるなけんと、漢王笑て謝して曰く、吾寧ろ智を鬪はさん、力を鬪はす能はずと、更に羽を責めて曰く、始め項羽と命を懷王に受

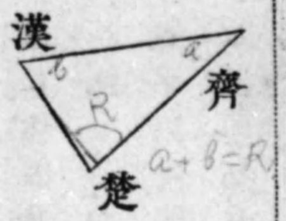
くるの時約らく先關中を定むるもの之に王たらんと、羽約に負き我を蜀漢に王こせり、是れ其罪の一なり、項羽矯て鄉子冠軍を殺して自から尊ふす、是其罪の二なり、項羽已に趙を救て當に還り報ずべし、而して擅に諸侯の兵を劫かして關に入る、是れ其罪の三なり懷王約すらく秦に入りては暴掠するなからんと、項羽秦の宮室を燒き始皇の冢を發き私に其財を收む、是れ其罪の四なり、又彊て秦の降王子嬰を殺す、是れ其罪の五なり、詐て秦の子弟を新安に坑にするもの廿萬、而して其將を王とす、是れ其罪の六なり、項羽諸將を善地に王とし、故王を徙逐し臣下をして爭て叛逆せしむ、是れ其罪の七なり、項羽義帝を逐ひ自から彭城に都し諸王の地を奪ひ多く自から予ふ、是れ其罪の八なり、項羽人を殺して陰かに義帝を江南に弑せしむ、是れ其罪の九なり、夫れ人臣

として其主を弑し、己れに降れるを殺す、政を爲す事平ならず、約を主りて信ならず、大逆無道天下の容れざる處是其罪の十なり吾れ義兵を以て諸侯に從ひて殘賊を誅す、將に刑餘の罪人をして項羽を擊殺せしめんのみ、何を苦しみてか自ら輕んじて汝輩と挑戰せんと、項羽聞て憤怒措く能はず、弩を伏せ漢王を射其胸に傷く漢王張良の勸を用ひ、傷を包み、故らに輕傷を裝ひ諸軍を勞して士卒の心を安んぜしむ、既にして蕭可更に關中の兵を送りて漢王の軍容を盛にし彭越又益楚の糧を奪ふ、既にして齊王韓信又漸く進みて楚の後に迫るあり羽遂に策の出つる所を知らず遂に漢王と約し天下を二分し、鴻溝以西を漢とし以東を楚とせんとす、漢王之を許す、羽漢王の父母妻子を歸し、兵を引て東歸す、張良陳平漢王に說て曰く、今漢天下の大半を保ち、諸侯多く

之に歸す、而して楚兵困憊し糧食に乏し、此天楚を亡ぼさんとするなり、今釋して討たずんば、是れ虎を山に放つが如く、必ず他日の害をなさんと、漢王其言に從ひ、急に兵を進めて、羽を追躡し、信越二人に命じ、日を期して來り會せしめ、以て大に項羽を垓下に討つ、

九　漢楚齊の鼎立

鴻溝を以て漢楚天下を分たざるの時、漢王は今の山西省の南部及陝西省を有して、更に河南省の一部を保ち、項羽は河南安徽江蘇三省を有し、韓信は三東省にあり、三人相鼎立し宛も二等邊三角形の一角を守るが如く、此内漢王項羽の守れる二角は底邊にあり韓信は頂角にありて其度稍小なり、故に二角の和は常に他



の一角より大なるものと一般と齊漢に反せずんば楚必ず危く、齊楚に降は漢必ず滅するの形勢にてありき、而して今や韓信進みて將に高祖と羽を挾擊せんとするを聞き羽大に恐れ人をして信に說かしむるに漢に反し楚と共に天下を分たんことを以てす、然ども信此時既に齊王となりて漢の恩を思ふと深く、顧みて項羽の嘗て我に薄かりしを想起し、謝して曰く、嘗て項羽に事ふるや官郎中に過きず、位執戟に過きず、言聽かれず畫用ひられず、故に楚に倍きて漢に歸せり、漢王我に上將軍の印を授け、我に數萬の衆を予へ、衣を解きて我に衣せ食を推して我に食ませ、言聽かれ計用ひらる、故に吾以て此に至るを得たり、夫れ人我に親信す、我之に倍かば不祥なり、死すと雖ども易へずと、時に齊人蒯通なる

ものあり、今漢楚相鬪ふに當り、信の足右に投せば漢王勝ち、左に投せば項羽勝つべく、天下の權一に信の掌中にあるを見說て曰く、

天下初めて難を發するや、俊雄豪傑號を建て、一呼ずれば天下の士雲の如く合ひ、霧の如く集まる魚鱗襍還熛至として風起せり、此時に當り憂秦を亡ぼすに在るのみ、今は楚漢分爭し、天下無罪の人をして、肝膽地に塗れ、父子骸骨を中野に暴さしむるもの勝て數ふ可からず、楚人彭城に起り轉鬪北るを逐ひ、滎陽に至り利に乘じて席卷し、威天下に震ふ、然して兵京索の間に困しみ、西山に迫して進む能はざるもの此に三年なり、漢王數十萬の衆に將として、鞏雒を距て山河の險を阻て一日數戰尺寸の功なく、折北救はず滎陽に敗れ城皐に傷き、遂に宛葉の

間に走る、此れ所謂智勇俱に困しむ者なり、夫れ銳氣險塞に挫かれて糧食內府に竭き百姓罷極怨望し、容々倚る所なし、臣を以て之を料るに、其勢天下の賢聖に非れば、固より天下の禍を息むる能はざるなり、

先づ徐ろに楚漢の勢を論じ、更に天下の賢聖を以て信に擬して曰はく、

今の時に至り兩主の命足下に懸れり、足下漢の爲めにせば則ち漢勝たん、楚に與すれば則ち楚勝たん、

今臣肝膽を輸し足下の爲めに計るに兩利して俱に之を存するに如かず、天下を三分し鼎足せば、其勢敢て先つ動くことなからん、足下の賢聖を以て甲兵の衆を有ち、彊齊に據り燕趙を從へ、空虛の地に出て其後を制し、民の欲に因り西鄉して百姓の

爲めに命を請はゞ、則ち天下風走して響應し、孰か敢て聽かざらん大を割き疆を弱ふして以て、諸侯を立つ諸侯已に立ち天下服聽し而かも齊に歸德せん齊の故を案じ膠西の地を有ち諸侯の德を懷ひ深拱揖讓せば、天下の君王相率て齊に朝せん蓋し聞く天の與ふる所取らざれば反て其咎を受く、時至りて行はざれば反て其殃を受くと願はくは足下之を熟慮せよ此の言稍美なりと雖ども未だ以て信を動かすに足らず故に信之に答へて曰く、

漢王我を遇する甚だ厚く、我を載するに其車を以てし、我に衣するに其衣を以てし、我に食ましむるに其食を以てす、吾之を聞く、人の車に乘るものは人の患を載せ、人の衣を衣るものは人の憂を懷く人の食を食むものは人の事に死すと、吾豈に以て利に嚮き義に倍くものならんやと、

蒯通則はち更に進み說きて曰はく、

足下自ら以爲らく漢王に善しと、萬世の業を建てんと欲す、臣竊かに以て誤りとなす、始め常山王成安君布衣たるの時相與に刎頸の交を爲し、後張黶陳澤の事を爭そひ二人相怨、常山王項王に背き奉項嬰頭して竄逃し、漢王に歸す漢王の兵を借て東下し、成安君を泜水の南に殺し、頭足處を異にし率に天下の笑ひとなる、此二人は相與に天下の至驩なり、然れども卒に相禽するものは何ぞや、患多欲に生じて人心測り難ければなり今足下忠信を行ふて以て漢王に交はらんとするも、必ず二君の相與にするよりも固かる能はざるなり、而して事張黶陳澤よりも多大なり、故に臣以爲らく足下漢王の己を危ふせざる

を必するも亦誤まれりと、大夫種范蠡亡越を存し勾踐を覇とす、功を立て名を成し而して身死亡す、野獸已に盡て獵狗烹らる、夫れ交友を以て之を言へば、則はち張耳と成安君とに如かず、忠信を以て之を言へば、則はち大夫種范蠡の勾踐に於けるに過ぎず、此二人の者以て觀るに足る、願はくは足下之を深慮せよ、

人心の賴むに足らざるを說くと反覆叮嚀にして、忠信交友の信ず可からざるを論じ、更に言を進めて曰く、

且つ臣聞く勇略主に震するもの身危ふく、功天下を蓋ふもの賞せられずと、臣請ふ大王の功畧を云はん、足下西河を涉り、魏王を虜にし、夏說を擒し、兵を引き井徑を下り、成安君を誅し趙を徇へ燕を脅かし、齊を定め、南楚人の兵二十萬を摧き、東龍且

を殺し、西鄕して以て報ず、此所謂功天下に二なく略世に出でさる者なり今足下主に震するの威を戴き、賞せられざるの功を挾み楚に歸せば楚人信ぜず、漢に歸せば漢人震恐せん、足下是を持して安くに歸せんと欲する乎、夫れ勢人臣の位に在りて主に震するの威を有ち、名天下に高し竊に足下の爲めに之を危ぶむと、

微を穿ち細を剖き、往を以て來を推し信の岌々として身危き所以を論ず、信の心稍動くと雖ども猶決する能はざるもの數日なり、通又說て曰く、

夫れ聽は事の候なり、計は事の機なり、聽過き計失し而して能く久安なる者鮮し矣、聽一二を失せざるものは亂すに言を以てすべからず、計本末を失はざるものは紛すに辭を以てすべ

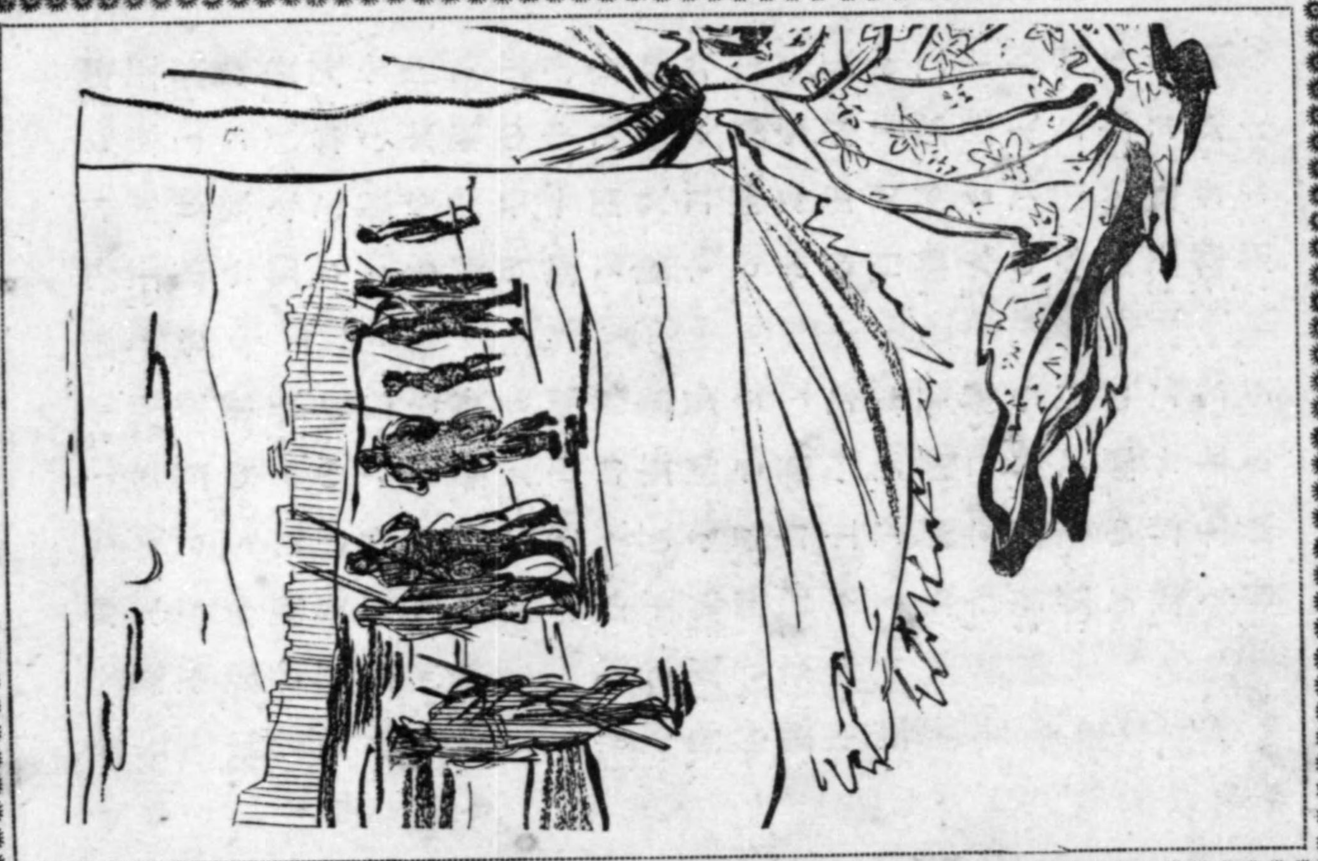
からず、夫れ厮養の役に隨ふもの萬乘の權を失し、儋石の祿を守る者卿相の位を闕く、故に知は決の斷なり、疑は事の害なり毫釐の小計を審にして天下の大數を遺し、智誠に之を知りて決敢て行はざる者は百事の禍なり、故に猛虎の猶豫は蜂蠆の螫を致すに若かず、騏驥の跼躅は駑馬の安歩に如かず、孟賁の狐疑は庸夫の必至に如かざるなり、舜禹の智有りと雖ども、吟じて言はざれば、瘖聾の指麾に如かざるなりと、此言能く之を行ふを貴ぶなり、夫れ功は成り難くして敗れ易く、時は得難くして失ひ易し、時乎時乎再び來らず、願くは足下之を詳察せよ迂餘曲折殆んど言の至れるものあり、然れども信固く高祖の我を捨ざるを思ひ義として之に負くべからずとなし、遂に通の言を用ひず、兵を進めて垓下に項羽を討つ、齊の遂に漢を捨てず、羽

をして孤立せしめたるもの、實に漢王信を齊王に封じたるの結果なり、張良陳平の躡足耳語の功亦偉なる哉、

十　項羽の敗死

漢王韓信彭越と會し項羽を垓下に討ち、大に之を敗り、遂に羽を殺し天下始めて定まる、實に秦を敗りてより五年なり、司馬遷垓下の戰を叙して曰く、

項王の軍垓下に壁す、兵少く食盡く漢の軍及諸侯の兵之を圍むこと數重夜漢の軍四面楚歌するを聞き項王乃はち大に驚きて曰く漢皆已に楚を得たるか、是れ何ぞ楚人の多きや、項王則ち夜起きて張中に飲す、美人あり名は虞、常に幸せられて從ふ駿馬あり名は騅、常に之に騎す是に於て項羽乃ち悲歌慷慨



し自ら詩を爲て曰く、

力拔山兮氣蓋世　時不利兮騅不逝
騅不逝兮可奈何　虞兮虞兮奈若何

歌ふ數闋美人之に和し項王泣數行下る左右皆泣て能く仰ぎ視るなし、是に於て項王乃ち馬に上て騎す、麾下の壯士騎して從のもの八百餘人直に夜圍を潰いて南に出て馳せ走る平明漢軍乃ち之を覺り、騎將灌嬰をして五千騎を以ゐて之を追しむ、

項王淮を渡るとき騎の能く屬するもの百餘人のみ、項王陰陵に至り迷ふて道を失ひ、一田父に問ふ、田父紿きて曰く、左せよと、左して乃はち大澤の中に陷る、故を以て漢追ふて之に及ぶ項王乃ち復兵を引て東し東城に至る、乃ち二十八騎あり、漢の

騎追ふもの數千人、項王自から度るに脫するを得ずと、其騎に謂て曰く、吾兵を起してより今に至りて八歲身七十餘戰當る所は敗れ、擊つ所は服し、未だ嘗て敗北せず、遂に覇として天下を保てり、然るに今や卒に此に困しむ、此れ天の我を亡ぼすなり、戰の罪にあらざるなり、今日固より死を決す、願くは諸君の爲めに決戰し必ず三たび之に勝たん、諸君の爲めに圍を潰し、將を斬り旗を刈て諸君をして天の我を亡ぼすにして、戰の罪にあらざるを知らしめんと、乃ち其騎を分ち以て四隊となし四もに嚮ふ漢の軍之を圍むこと數重項羽其騎に謂て曰く吾公の爲めに彼の一將を取らんと、四面の騎をして馳せ下らしめ、山東に三處と爲らんことを期す、

是に於て項羽大呼馳せ下る、漢の軍皆披靡す、遂に漢の一將を斬る、是の時赤泉侯騎の將と、なり項王を追ふ、項羽目を瞋らして之を叱す、赤泉侯人馬俱に驚きて辟易すること數里其騎と會して三處と爲る漢の軍項王の在る所を知らず、乃ち分ちて三と爲し復た之を圍む、項王乃はち馳て復た漢の一都尉を斬り數十百人を殺す、復た其騎を聚るに亡ふところ其兩騎のみ、則はち其騎に謂て曰はく、何如騎皆伏して曰く、大王の言の如しと

是に於て項王乃ち東の方烏江を渡らんと欲す烏江の亭長船を艤して待つ、項王に謂て曰く、江東小なりと雖ども方千里衆數十萬人亦王たるに足れり、願はくは大王急に渡れ、今獨り臣船あり、漢の軍至るとも以て渡ることなけんと、項王笑て曰く、天

の我を亡ぼすなり、我何ぞ渡ることをなさん、且籍江東の子弟八千人と江を渡りて西せり、今一人の還るなし、縱令江東の父兄憐て我を王とすとも、我何の面目ありて之に見へん、縱ひ彼れ言はざるも籍獨り心に愧ぢざらんやと乃ち亭長に謂て曰く吾公の長者なるを知る、吾此馬に騎すること五歲當る所敵なし嘗て一日に行くこと千里なり、之を殺すに忍びず以て公に賜ふと、

乃ち騎をして皆馬を下り步行せしめ、短兵を持して接戰す、獨り籍が殺す所漢の軍數百人項羽の身亦十餘創を被むる顧みて漢の騎司馬呂馬童を見て曰はく、若は吾故人に非ずやと、馬童之に面王翳に指して曰く、此れ項王なりと、項王乃ち曰く吾聞く漢我頭を千金邑萬戸に購ふと、吾若が爲めに德せんと、乃

ち自から刎ねて死す、王翳其頭を取り、餘の騎相蹂踐し、項王を爭ふて相殺すもの數十人、最も其後に郎中騎揚喜騎馬呂馬童郎中呂勝揚武各其一體を得、五人共に其體を會するに皆是なり其地を分ちて五となし、呂馬童を封して中水侯となし、王翳を封じて杜衍侯となし、揚喜を封じて赤泉侯となし、揚武を封じて吳防侯となし呂勝を封して涅湯侯となす、

項羽死して楚の地漢に降り、只下らざるもの魯あるのみ、漢其禮義の國にして節の爲めに嬰守するを憐み之を屠るに忍びず羽の頭を示して之を降し天下全く定まる、

漢王羽の首級を見て感慨果して奈何んぞや一睥三軍を慴伏せし双眼長へに瞑し、一呼萬卒を進退せし口は固く結び、肉は落ち髮は亂れ、昨日の勇威今焉くにか見ん、回顧すれば數年の昔相並

びて懷王に仕へ、騎を連ね兵を併せて彊秦に向ひし人は、幽明道異にして空しく其遺骸と相見るのみ、想ふて茲に至れば漢王豈に慨然たるものなからんや、乃ち爲めに哀を發し魯公の禮を以て之を穀城に葬むり、泣て而して去る、魯公の禮を以てせしものは、初め懷王項籍を魯に封じたるの緣故によるものなり、

漢王起りてより敵とする處先に秦あり、後に楚あり、秦素より侮る可からずと雖ども、其將は眞に秦の爲めにするの心なく、卒は始めより鬪志なし、故に漢王は未だ以て大に心志を勞するに足らざりしも、楚にありては其卒極めて精强にして鉅鹿の戰の如きは諸侯の軍壁上より觀望して慄恐せざるものなかりき、而して之に將たる項羽に至りては、山を拔くの力世を蓋ふの氣ありて軍を行るゝ神の如く戰へば必ず勝ち攻むれば則はち取る向ふ

所敵なく加ふるに能く士卒の心を得、一軍擧て一人の如く、人々皆羽の爲めに死せんとを冀ふものなり、故に漢王にして羽に當る成敗の數始めより明なるが如し、而して漢王志を決し先づ三秦を定め、一たび楚と戰ふや果して大に敗れ、殆んと其軍を殘亡し諸侯亦多くは離反す、其後戰の毎に又敗多くして勝は則はち少く然して失ふて又之を得、敗れて又起り、遂に終局の勝を制したるものは何ぞや、他なし其人物の大小によるのみ、羽鋭なりと雖ども、其器小なり、小なるが故に能く容るゝ能はず、苟も容るゝ能はず故に動もすれは人を疑ひ又動もすれは之を捨つ、或は秦の降卒廿萬を阬にし或は范增を捨つるが如き、是れ皆其器の小なるに坐するものにして、能く江東子弟の心を得るも天下の心を得る能はざる所以なり、漢王に至りては則はち然らず、鈍と雖

ども器大なり、器大なるが故に清濁併せ呑むを得べく、或は慢或は矯なるものも、一能あれば則ち之を用ひ、用ゆれば又疑はずして之を任ず、故に人々各其力を致して、漢王の手となり、足となり必ず死せんとを願ふ、是れ其遂に羽に克ちたる所以なり、要するに漢王項羽の人物の差異は次の會話に於て明なるを得べし、

高祖雒陽の南宮に置酒す、高祖曰、列侯諸將敢て朕に隱すとなく皆其情を言へ吾天下を有つ所以のものは何ぞ、項氏の天下を失ふ所以は何ぞ、高起王陵對て曰く陛下慢にして人を侮る項羽は仁にして人を愛す、然れども陛下人をして城を攻め、地を略せしめ、降下する所のもの因て以て之を予へ、天下と利を同ふす、項羽は賢を妬み能を嫉み功あるものは之を害し、賢なるものは之を疑ふ戰勝てども人に功を予へず地を得れども

人に利を予へず、此天下を失ふ所以なり、高祖曰、公其一を知りて未だ其二を知らず、夫れ籌策を帷張の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾子房に如かず、國家を鎮め百姓を撫し餽饋を給して糧道を絶たざるは吾蕭何に如かず、百萬の軍を連ねて戰へば必す勝ち、攻むれば必ず取るは吾韓信に如かず、此三者は皆人傑なり吾能く之を用ふ、此吾天下を取る所以なり、項羽一范增ありて用ふる能はず、此其我が爲めに擒せらるゝ所以なりと、

能く人を知り己れを知るものと云ふべきなり

十一　天下一統

楚定まり、魯平ぎて、天下一人の漢王の命に從はざるものなし、翌年正月諸侯將相皆漢王に請ふて、尊んで皇帝となさんとす、漢王辭して曰く、帝位は是れ賢者の任すべき所、吾當る所にあらず、苟くも其人にあらずして猥りに盛名を負ふも、終に久からざるなりと、群臣皆曰く、大王微細より起り、殘賊を誅し、天下を平定す、其功固より偉とすべし、四海に君臨し四民をして安んぜしむべきもの大王にあらずして誰ぞ、臣等願はくは死を以て永く帝位を守らんと、漢王猶ほ聽かず、辭するもの三たび、群臣の固く請ふにより已むを得ずして曰く、諸君必す以て便とせば、又國家に便ならんと、六年二月を以て皇帝の位に汜水の南に即く、實に我朝の孝元天皇即位十三年なり、

高祖帝位に即き、大に功を論じ賞を行ふ、先づ蕭何を以て功第一となし、酇侯に封し食邑最も多し、他の功臣皆平ならずして曰く、

吾輩身矢石を冒し、或は旗を搴り城を陷る多きは百餘戰少きも數十合而して蕭何身關中に安座し未だ嘗て汗馬の勞なく、只文墨を以て議論するのみ而して今は功第一たり、何の故たるを知らずと、高祖曰く、諸君獵を知れりや、曰く之を知る、曰く獵狗を知れりや、曰く之を知る、高祖の曰く、夫獵は追ふて獸兎を殺すものは狗なり、發蹤して獸の處を指示するものは人なり、今諸君徒だ能く走獸を得るのみ功は狗なり、蕭何か發蹤指示する如きに至りては功は人なり、且つ諸君獨り身を以て我に隨ひ多きものも兩三人なり、今蕭何は宗數十人を擧げて皆我に隨ふ、功忘る可からざるなりと、群臣復た言ふものなし、蕭何の賞既に終り、曾參張良以下に及び、次に將に位次を定めんとす、群臣皆曾參を第一に擬す、高祖猶憚かりて云はず關內侯鄂君進みて曰く、群臣の議皆

誤れり、夫れ曾參野戰略地の功此れ特に一時の事なり、夫れ上楚と相戰ひ幾度か衆を失ふ、而して何常に關中より軍を遣はし其缺を補ふ、又漢楚の滎陽に相守る數年なるや、何關中より轉漕し食を給して乏しからず、又陛下屢々山東に亡ふと雖ども、何常に關中を全ふして陛下を待つ、此萬世の功なり、今曹參等百數なしと雖ども何ぞ漢に缺かん、漢之を得るとも必ずしも全きを保せず、奈何んぞ一旦の功を以て萬世の功に加ふるを得んや、蕭何素より第一たるべしと、高祖大に喜びて曰く、可なりと、乃ち蕭何を以て位第一とし劍履殿に上るを許す、

蕭何以下二十餘人の行賞既に終るも、其餘皆功を爭ふて決するを得ざるもの半歲なり、一日高祖雒陽の南宮にあり、復道より見るに諸將往々沙中に坐して語るあり、高祖怪しみ張良に問ふて

曰く、彼等何をか語る、良の曰く、陛下知らずや此謀反するのみ、高祖曰く、天下既に安定なり、何が故に敢て反せんとする、良曰く、陛下布衣より起りて此徒と天下を定む、今陛下天子として封ずる所は蕭曹等故舊の親愛する所ろ、誅する所は生平嫉惡する所なり、而して今吏功を計りて久しく決せず、故に彼の輩平生些少の過失を以て誅に遭はんを恐れ即ち相謀りて與に反せんとするのみ、高祖曰く、之を爲すと奈何、良が曰く、陛下最も惡む所にして、衆の齊しく知る所は誰ぞ、高祖曰く雍齒あり、朕久しく彼が窘辱を怒る、只其功多きが故に少時之を許すのみ、良が曰く、今急に先づ雍齒を封ぜよ、高祖之に從ひ、大に群臣に宴を賜ひ、席上雍齒を封じて什方侯となす、群臣皆喜びて曰く、雍齒すら尙侯たり我屬患なけんと、

劉敬なるものあり、高祖に關中に都せんことを勸む、而して左右の大臣多く山東の人なりしかば、雒陽を以て可となして曰く、雒陽東に城皐あり、西に殽黽あり、帝者の國なりと張良曰く、雒陽安固と雖ども其中小なり、加ふるに四面敵を受く、奈んぞ武を用ふるの國ならん、夫れ關中は殽函を左にし、隴蜀を右にし、沃野千里南に巴蜀の饒北に胡苑の利あり、三面を阻して守り獨り一面を以て東の方諸侯を制す、諸侯安定ならは河渭より天下に漕輓して西の方京師に給し、諸侯變あれば流に順て下らん、以て委輸するに足る、此れ所謂金城千里天府の國なり、劉敬の說是なりと高祖其言を納れ、即日車駕西幸し、關中に都し名けて長安と云ふ、論功既に終り、國都又定る漢室創業の時代は去りて而して守成の世は來れり、高祖果して如何して其天下を保たんとするか、

十二　高祖の政治

其一　諸侯王の陶汰

高祖項羽と覇を爭ふに急にして心を諸侯王の配置に用ふるに遑なく只其欲する處に隨ひ、國を得れば則はち王とし、地を略すれば、則はち侯とし、偏に其歡心を失はざらんことを務め以て能く項羽を滅すを得たり、其間韓信を齊王となすが如き流石に高祖も一時は躊躇する所ありしが、終に意を決して之を許せり、蓋し道に當るの豺狼太だ猖獗にして、到底後を窺ふの狐狸を顧みるを得ざりしなり、

今や項羽既に亡ぶ、高祖窃かに顧みて諸侯王の封彊を見て、果して奈何の感かある方百千里に餘り或は江河の利を占め、或は山

谿の嶮に據り、或は沃野に居り、或は魚介の富を有つもの其數も亦甚だ多しとす、而して漢は則はち一方に僻在し、外に宗室の相牽援すべきものなし、今は乃公能く天下を治むと雖ども、乃公の子乃公の孫能く乃公の手腕を傳ふべきや、否や、將た諸侯王の子諸侯王の孫能く漢室の恩を記するを、諸侯王の如くなるべきや否や、乃公の子孫は則はち庸劣にして、諸侯王の子孫は則ち漢を捨つるの心を生ずるなからんや、事若し茲に至らば漢の政柄能く一日を保すべきや否やこの憂慮、必ずや其胸裡に起りて悚然として自ら恐れたるをなくんはあらざるなり、

高祖の憂一たび是に及び、而して指を屈すれば先づ楚王韓信あり、梁王越あり、次に燕王臧荼あり、淮南王黥布あり、是輩皆攻城野戰の功を以て布衣より出てゝ將帥となり、高祖を助けて項羽

を滅ぼしたるの英傑にして、皆其功や偉、其力や强、恐くは後世に利ならざるものなり、

高祖素より克く人に忍ぶ、即はち今諸王の地を削り徒に其怨を增て永く害を後世に貽さんよりは寧ろ之を誅鋤し憂を根本より除去するの捷徑なるに如かずとなし、苟くも跡の疑ふ可きあり、或は人の來りて其反を告ぐるあれは、直に之を討滅せんとす、」

高祖心窃に定まる所あり、只其時機の至るを俟のみ、既にして其第一着に來りたるは燕王臧荼にして人の其反を告ぐるあり、高祖直に討ちて之を滅す、實に即位の後僅かに八ケ月なり、次で叛を以て誅せられたるものを潁川侯利幾となす、(四)

即位の翌年、人あり楚王韓信の叛を告ぐ、高祖之を討んと欲し、計を陳平に問ふ、平曰く、陛下の兵と信の兵と其精强孰與ぞや、高

祖曰く過ぐる能はざるなり、平又問ふて曰く陛下の諸將兵を用ふるに信に過ぐるものありや、曰く、及ぶものなきのみ、平曰く、兵は過ぐるなく、將は則はち及ばず、而して今之と力を格せんとす、臣深く陛下の爲めに之を危むのみ、高祖曰く之を爲すを奈何、平曰く、古天子巡狩して諸侯を會するのことあり、今陛下南雲夢に遊び以て諸侯を會せば信必ず來らん既に來らば是一力士の事のみと、高祖其計を用ひ、武士をして俟を縛せしむ、信曰く、果して人の言の如く、狡兎死して良狗烹らる、高鳥盡て良弓藏まる、敵國破れて謀臣亡ぶ、天下已に定まれり、我固より當に烹らるべしと、高祖信を械繫して雒陽に至る、輒ち之を殺さんと欲すれども信は戰勳第一にして諸將の最も重ずる所なり、今其罪跡未だ明ならずして敢て之を誅すれば、諸將皆疑懼して或は爲めに天下の騷

擾せんとを恐る、故に暫く赦し貶して淮陰侯となす、

韓王信馬邑にあり、以て北の方匈奴を禦ぐ、既にして功なく又漢の疑ふ所となり遂に匈奴に降る、實に韓信淮陰の侯に貶せられたる後一年なり、

韓信淮陰侯となるの後、居常怏々として樂まず、乃ち鉅鹿守陳豨と密に約する所あり、十一年豨遂に反し、高祖親征の途に上るや、信病と稱して從はず、密に豨と相應し、更に家臣を部署し、先つ呂后と太子とを襲ひ、以て高祖を挾擊せんとして事頗る漏る、呂后蕭何の謀を用ひ、詐りて曰く、高祖既に豨を誅せりと聞く、群臣來り賀せよと、信之を聞き又入りて賀す、呂武士をして信を捕へしめ、終に之を長樂宮の鐘室に斬る、斬らるゝに臨み呼て曰く、吾悔ゆらくは蒯通の計を用ひず、乃ち兒女子の爲めに詐らる、豈に

天に非ずやと、

十一年梁王彭越反して誅に遇ひ、同年淮南王黥布反す、十二年高祖親から布を會甄に討ち之を走らす、既にして燕王盧綰又反す、樊噲周勃をして之を討たしむ、

是に於て戰功の士前後覆滅して、高祖稍意を安んずべきものあり、而して高祖は一方に是等諸功臣を誅鋤すると同時に、又一方には其地に同姓を封じ以て宗室の羽翼となせり、則はち信を捕へて齊楚の地を沒するや將軍劉賈を荆王として淮東を與へ其弟交を楚王として淮西を與へ、其子肥を齊王とし盡く其七十餘城を與ふ、

其二　禮義　文學

秦の時薛に叔孫通なるものあり、文學を以て徵せられて博士となる時恰も陳勝兵を擧て山東頗ぶる亂るゝに會す、二世博士等を召して山東の事を問ふ、叔孫通答へて曰く、此特に群盜鼠竊狗盜のみ、何ぞ齒牙の間に置くに足らんと二世悅び賞賜する所あり、叔孫通宮を出づるや急に秦を去りて楚に降り、又久しからずして漢に降り、偏に漢王に迎合し、只將を斬り旗を搴るの士を言て、未だ以て爲す所あらざりき、漢の五年高祖定陶に即位するや、叔孫通其儀禮を制す、而して群臣皆佐命の功臣にして、門地始めは高祖と撰ぶなし、加之高祖秦の苛法を去り、專はら簡易を旨とせしかば、更に以て群臣を制馭するの道なく、皆酒を飲み功を爭ひ、或は妄りに呼號し、劍を拔き柱を擊ちて餘勇を示すあり甚だ喧躁を極め、高祖頗ぶる之を厭ふの情あり、叔孫通即ち謂らく

我用をなすの時至ると、進み奏して曰く、夫れ儒者は與に進取すべからざるも、與に成を守るべきなり、臣願くは魯の諸生と臣が弟子とを徵し、共に朝儀を起さん、凡そ五帝樂を異にし三王禮を同ふせず、是れ禮は時世人情に因りて之が節文を爲すものなればなり、今古禮と秦儀とを參酌せば、以て時宜に合するを得べしと、高祖之を許す、叔孫通由て魯の諸生を徵して三十餘人を得たり、中に二人の敢て行かざるものあり、曰く、禮樂の由て起るや德を積むこと百年にして後興るべきなり、而して面諛の書生一朝にして豈に能くせんやと、叔孫通其固陋を見冷罵一番して曰く、若は眞に鄙儒なり、時變を知らずと、遂に徵する所の書生と高祖の左右と、其弟子百餘人とを合せ、野外に新に禮典を學習し、漸くにして皆之に熟するを得たり、高祖其可なるを見、輙ち群臣をして

之を學ばしむ、

七年長樂宮新に成り諸侯群臣皆朝賀し、一に新禮に依る、其次第に曰く、

平明に先ち謁者禮を治して引し次を以て殿門に入る、廷中車騎を陳ね、步卒宮を衛り、兵を設て旗志を張る、殿下郎中陛を挾み陛每に數百人あり、功臣、列侯、諸將軍、軍吏次を以て西方に陳して東鄉し、文官丞相以下東方に陳して西鄉し、大行九賓を設け、臚句を傳ふ、是に於て皇帝の輦房を出て百官執職して警を傳へ諸侯王以下吏六百石に至るまでを引き次を以て奉賀す諸侯王より以下振恐肅敬せざるはなし、禮畢るに至り復た法酒を置き、諸臣殿上に侍坐し皆伏して首を抑ふ、尊卑の次を以て起て壽を上つり、觴九行にして謁者言して酒を罷む、御史法

を執り、儀の如くならざるものあれば輒ち引去す、朝を竟へ置酒するも敢て諠譁し禮を失するものなし、

議禮整然一絲亂れず、群臣恐敬の情想見すべきなり、高帝輒ち曰く、吾迺ち今日にして皇帝の貴きを知るなりと、大に叔孫通を賞し、後太子の大傅とし諸弟子を拜して郎となす、

儀禮既に定まりて萬民皆天子の尊を知る、然れども是れ未だ以て漢室を永きに傳ふるに足らざるなり、楚人陸賈なるものあり早くより高祖に從ひ口辯を以て重んぜらる漢既に天下を併するに當り南越王尉他を說きて越王の印綬を受け、漢に臣事せしめたるの功を以て遷りて太中大夫たり、賈時々進みて詩書を說稱し、常に偃武興文の要を云ふ高祖罵て曰く廼公馬上に天下を得たり、安んぞ詩書を以て事とせんと、賈即ち曰く、馬上に之を得

たりとも寧ろ馬上を以て之を治むべけんや且つ湯武は逆取して之を順守す文武竝用は長久の術なり、昔は吳王夫差智伯武を極めて亡び秦は刑法に任して變ぜず卒に滅せらる、嚮きに秦已に天下を幷せ、仁義を行ひ先聖を法とせば、陛下安んぞ得て之を有とするあらんやと、高祖之を聞き慙る色あり、乃ち賈に謂て曰く、試みに我爲に秦の天下を失ふ所以吾の之を得る所以のものは何ぞ、及び古今の成敗の跡を著はせと、賈乃ち退きて略ぼ存亡の徵を論して十二編を作る、一編を奏する毎に高祖必ず善と稱し、其書を名けて新語と云ふ、戰國以來文學廢して道義地を拂ひ人々只禽奔獸走世を擧て溷濁殆んど人文の光明なかりしが玆に至りて僅かに一道の微光を認むるを得たり後世文運の隆盛を致したるもの、其萠芽は實に高祖の時にあり世の秦に短くし

て漢に長き所以のもの豈に典禮と文學とに資する所なしと云はんや、

其三　首都の經營

八年高祖親から東の方韓王信を征して還る、時に丞相蕭何自から工を督して未央宮を營し、東闕北闕を造り、前殿武庫及び太倉等皆備はらざるなく、規模の雄大なる結搆の壯麗なる、共に人目を驚かせり、高祖還りて之を見、驚き且つ怒り蕭何を召し之を責めて曰く、天下匈々として戰に苦しむこと數歲、成敗猶ほ未だ知るべからざるものあるなり、而して何すれぞ宮室を治めて其度に過ぐると、蕭何答へて曰く、天下方に未だ定まらず、夫れ唯だ未だ定まらざるが故に宮室を營するのみ、夫れ天子は四海を以

て家となす、其居る所壯麗なるにあらずんば以て威を重くすることなし、且つ夫れ一たび宮室を營むや、其規模を宏にし、後世をして又之に加ふることあらしめざるは、國を創する者の務なりと、高祖悅び又蕭何を咎めず、

劉敬使して匈奴より還り奏して曰く、匈奴河南白羊樓煩王、我長安を去ること近き者七百里に過ぎず、輕騎一日一夜にして以て秦中に至るべし、秦中地肥饒にして能く之を充實ならしむべしと雖も、今や新破の後民烟甚だ稀少なり、夫れ諸侯初めて起る時、齊の諸田楚の昭屈景に非れば能く興るなし、今陛下關中に都すと雖ども、實は人少く、北胡寇に近く、東に六國の族あり、一日變あらば陛下亦未だ枕を高ふして臥するを得ざるなり、臣願はくは陛下の齊の諸田、楚の昭屈景、燕趙韓魏の後、及び豪傑名家の裔を

徙して關中に居らしめんことを、斯くの如くならば關中の地日に充實し、人足り家給して事無き時は以て胡に備ふべく、諸侯變あるの時は、亦率ゐて以て東伐するに足る、此本を彊ふし末を弱むるの術にして、王者の道なりと、高祖其言を可とし、關中に徙す所約十萬餘口なり、

宮室新に成り、參朝の者をして畏敬の念を生ぜしめ關中人漸く多く、地次第に拓けて富其數を加へ、帝都の面目全く備はれり是亦二百餘年の漢室に資したるの一なり、

其四　邊境

高祖先づ秦を滅ぼし次で項羽を倒し、遂に天下を定むるに至るまで、事毎に成功せざるものなかりしかど、終に成功を得ざり

しものは即ち邊境の事にてありき、

秦の西北に夷あり、匈奴と云ひ、其人慓悍騎射に巧なり、屢々中國に寇し、常に邊疆の患を爲せしかば、始皇蒙恬を遣はし、兵三十萬を發して萬里の長城を築き、以て之を防遏せり、高祖天下を定めて意是に及び、諸侯を封ずるの際、韓王信を太原に王とし、晋陽に都して夷人に備へしむ、既にして匈奴秋高く馬肥るの候を俟ち漢を犯す、信進みて包圍を潰破すること難く、退かば必ず帝の咎を受くべく、遂に策の出づる所を知らず、馬邑の地を以て降を匈奴に乞ひ、其將となり却て時に中國を襲ふ、翌七年冬高祖大に征夷の師を興し、自ら軍を督し、信を銅鞮に擊破し、進みて匈奴に向ふ、匈奴之を離石に迎へて大敗し、漸く退きて其國に蹙す、高祖北るを追ひ晋陽に至り、匈奴の主冒頓單于の代上谷に居るを聞き、先づ人を遣はし其情勢を探らしむ、匈奴之を知り故らに精英を匿し、示すに羸弱の兵を以てせしかば、使其詐を知らず復命して曰く、以て討つべきなりと、高祖尚信ぜず人を遣はすもの十度而して歸り報すると皆異るなし、高祖則ち軍を進め平城に至り、自ら馬を白登に驛ず、匈奴是を窺ひ好機至れりとなし、咄嗟其騎兵を發して高祖を圍む事七日、其馬西方は盡く白く、東方は盡く駵北方は盡く駵、南方は盡く騂にして軍容甚盛なり、漢軍中外隔絶相救餉するを得ず、高祖力殆んと屈す乃ち密に厚く單于の妻に賂ひ、僅かに虎口を脱するを得たり、是より單于漢を輕んじ邊に寇する事益々滋し、劉敬なるものあり高祖に說て曰く、天下初めて定まり士卒共に罷疲す、今單于兵彊く控弦三十萬、是れ武を以て屈すべからず、宜しく公主を單于に嫁し、單于在る時は之

を見るに子婿を以てし、單于死するの日は公主生む所代りて單于となり匈奴を以て外孫の國となすべしと、高祖公主と別るゝに忍びず、他人の女を名けて公主とし單于に妻し、且つ年々絮繒酒食を贈り、約して兄弟となり、以て一時の安を買ふを得たり(25)

漢楚相爭ふの時尉他なるものあり、南越を平定し自ら之れに王たり、高祖戰ふて之を屈するを望まず、陸賈をして尉他に南越王の印を賜ひ、漢の附庸たらしむ、賈尉他を見說て曰く、足下は中國の人、親戚昆第墳墓眞定にあり、而して今や天性に反し冠帶を棄て、區々の越を以て天子と抗衡せんとす、足下知らずや漢王は巴蜀に起り天下を鞭笞し、梟雄項羽を誅し五年にして海内を平定す、是れ天の建つる所人力に非ざるなり、今足下の事天子に聞ゆるも、天子只百姓の新に勞苦するを憐み、且らく之を休すのみ、

而して更に臣を遣はし足下に授くるに越王の印を以てす、足下宜しく郊迎し北面臣と稱すべし、乃ち新造未集の越を以て、至彊の漢と爭はんとす、漢若し一偏將を遣はし、十萬の衆を將て越に臨まば、則ち越人王を殺して漢に降らんと手を覆すが如きのみと、越王之を聞き稍服するの色あり乃ち問て曰く、我と蕭何曹參韓信と孰れか賢なる、賈曰く、王賢なるに似たり、復た曰く、我と皇帝と孰れか賢なる、賈曰く、皇帝豊沛に起り暴秦を討ち彊楚を誅し、天下の爲に利を興し害を除き、五帝三王の業を繼き中國を統理す、中國の人億を以て計へ、地方萬里天下の豪腹に居る、人衆車輿萬物殷富政一家よりす是の如きは天地剖判の始めより未だ有らざる所なり、今王の衆數十萬に過ぎず、皆蠻夷にして山海の間に崎嶇たり、譬へば漢の一郡の如し、王何ぞ乃ち漢に比せんと

尉他大に笑て曰く、吾中國に起らず故に此に王たり、吾をして中國に居らしめば焉ぞ漢に若かざらんと、賈俺留數月強て印を付し高祖に復命して曰く、越王臣を稱し漢の約を奉ずと、高祖大に悅ぶ、

謂ふに漢は秦楚との交戰により殆んど其の力を消盡したるにより、到底又匈奴南越と爭ふの餘力を存せざりしによると雖ども、苟しくも一たひ之を討たんとを欲し一挫するや、又再擧の勇なく却て虜を矯らし中國を輕侮せしめ、或は只名義の上より臣として自から安ずるも、他は却て之を以て漢我に和親を乞ふ我故に之を許すのみとの感あらしめたる如きは、二者共に永く後患を貽したるものにして、實に高祖の一大失策と云ふべきなり

第五　後圖　崩御

皇后呂氏の生む所既に立ちて太子たりしが、高祖最も戚夫人生む所の趙王如意を愛して、太子を易ふるの心あり、諸大臣之を諫むれども能く之を動かすものなし、呂后憂苦措かず、計を張良に問ふ、良答へて曰く、骨肉の間の事、臣等口舌を以て爭ふとも能く爲す所なし、顧ふに高祖の服する所にして致す能はざる所のもの四人あり、蓋し高祖の慢にして人を悔るにより、義として漢臣たるを願はざるなり、今若し太子幣を厚ふし辭を卑ふし以て此四人を致すを得、他日之を隨へて高祖に朝せば、高祖或は太子を以て易へ難しとなすべしと、呂后其計を用ひ、四人を太子の客となす、既にして高祖黥布を討ちて歸り病甚しく、太子を易ふる

の念益切なり、只張良の諫により暫く之を猶豫し、太子を召して置酒す、時に太子に侍するもの四人あり、年皆八旬に餘り、皓髯白眉銀の如く、威儀嚴乎として犯すべからざるの風あり、高祖怪みて其名を問ふ、四人進み各其名を言ふ、曰く東園公曰く、角里先生、曰く綺里季曰く、憂黄公と高祖大に驚きて曰く、朕公等を求むるの日久しきも、公等常に山澤の間に遁辟す、今は吾兒に從ふて遊ぶもの何ぞや、四人曰く、陛下士を輕んじ善く罵る、臣等義として辱めらるゝを欲せず、故に恐れて亡るのみ、今太子の人と爲り仁孝恭敬にして士を愛し、天下頸を延て太子の爲めに死せん事を願ふ故に臣等來れるなりと、高祖曰く公等幸に太子を護せよと、宴終るの後高祖之を目送するもの久しく戚夫人を顧みて曰く、我太子を易へんと欲すれども太子の羽翼既に成る以て動かす

べからず、呂后は終に汝が主たるべしと、夫人泣咽止まず、高祖慰めて曰く、我が爲めに楚舞せよ、吾亦若が爲めに楚歌せんと、蓋し夫人の楚人なるを以てなり、

高祖歌て曰く、

鴻鵠高飛、一舉千里、羽翮已就、横絶四海、
横絶四海、當可奈何、雖有矰繳、尚安所施、

歌ふ事數闋、戚夫人嘘唏流涕して止まず、

曩に蕭何を相とし、張良陳平之を助けて政漸く定まり、韓信彭越等の梟雄順次に亡びて、皇子宗族代はりて王となり、藩屏始めて固く、今又太子の位全く定りて後事稍安きが如し、然れども高祖館舍を捐て、蕭何世を去るの後、長く高祖に事へて共に漢室を經營したる猛將謀士は、年若く恩薄きの少主に事へて、天下能く

安かるべきや否、是れ實に呂氏の憂ふる所なり、

高祖黥布を伐つの時流矢に中り傷遂に癒えず、宮に歸るの後漸く重し、呂后憂慮し醫を召して之を診せしむ、醫曰く、能く癒ゆべしと、高祖罵て曰く、吾布衣より起り三尺の劍を提げて天下を取れり、此天命にあらずや、今流矢の爲に苦しむもの乃ち又天にあり、扁鵲再來すと雖ども何の益かあらんと、遂に醫を斥けて見ず、病大漸するに及び、呂后問ふて曰く、陛下百歳の後蕭相國若し死せば誰を以て之れに代へんと、高祖曰く曾參可なり、呂后其次を問ふ、曰く、王陵可なり、然れども陵少しく戇なり、陳平以て之を助くべし、陳平智餘りあり以て獨り任ずべからず、周勃重厚にして文少し、然れども能く劉氏を安からしむるもの必ず勃ならん、大尉たらしむべしと、呂后復た其次を問ふ、答へて曰く、此の後は

亦知る所にあらざるなりと、

死生命あり、蓋世の英雄も亦遂に此運を免るゝ能はず、十二年四月を以て長樂宮に崩ず、

呂后變を恐れ喪を秘すること四日、事頗ぶる外に漏れ人々相安んぜず、道路或は傳へて曰く、呂后審食其と謀り諸將を誅せんとすと將軍酈商、審食其を見謂て曰く、吾聞く帝已に崩じて四日喪を發せず、而かも諸將を誅せんとすと、若し事斯の如くんば天下必ず危ふし、今陳平灌嬰十萬に將として滎陽を守り、樊噲周勃二十萬に將として燕代を定む、此徒帝崩じて諸將皆誅せらると聞かば、必ず兵を連ね還りて以て關中を攻めん、大臣内に叛き諸侯外に反せば、漢の亡びんを翹足して待つべきなりと、審食其入て呂后に奏す、乃ち急に喪を發し太子を立つ、是を孝惠帝と云ふ群

臣奏して曰く、高祖微より細より起りて亂世を撥して之を正に反し、天下を平定して漢の

大祖たり、其功最も高しとす、尊號を上つりて高皇帝とせんと、

孝惠帝立ちて郡國諸侯をして各々高祖の廟を立て、歳時祭祠せしむ、後ち帝高祖の嘗て沛に悲

樂したりしを顧ひ、沛を以て高祖の原廟とし高祖の歌はしめたりし兒百廿人をして皆吹樂せしめ缺くるとあれば即はち之を補し永く以て法となす、

十三　高祖の人物

微賤より起りて家をなすもの以て小なりとすべからず、然れども布衣より起りて國を爲すものに至りては、更に偉とすべきなり、高祖の如きは實に古今の偉人にして、其人と爲りを見るに長所一にあらず、以て武人となせば即ち武人なり、以て政治家となせば則ち政治家なり、所謂之を叩くと大なれば愈大なるものにして極めて方面の多き人物と云ふべきなり、故に今試みに種々なる方面よりして高祖の人物如何を見んとす、

其一

德川家康が大小幾百戰、嘗て燦爛たる大戰勝の譽なくして、終に能く其大をなしたるが如く、高祖も亦秦楚と爭ふて敗多くして勝少く而かも遂に天下を一統したりしもの是れ自から兵を用ふるに長ずる所ありて然るなり、蓋し家康高祖共に自から戰ふに當りては、兵に長じたるものにあらざれども、其眼は常に大局に注視して、縱令之を東隅に失するも、必ず又之を桑榆に收むるの策を按じ、胸中常に一成案ありて事に臨む、故に縱令自ら戰ふて利を得ずと雖ども、更に人を用ひて其功を收めしむるを得るなり、蓋し家康高祖の長ずる所は、兵を用ふるにあらずして、能く將を用ふるにあり、家康にありては內に井伊本多榊原あり、外

には藤堂伊達福島等ありて、以て天下の武權を得、高祖にありては内に樊噲曹參張良陳平あり、外に韓信黥布彭越等ありて、四百餘州を服せり、是れ皆將を用ふるの長あるにあらずんば然る能はざるなり、高祖韓信を虜にし、貶して淮陰侯となすの後、一日從容として之と諸將の能否を論じ、語次問ふて曰く、我が如きは能く幾何に將たらんと信曰く、陛下能く十萬に將たるに過ぎずと、高祖曰く、君に於ては何如、曰く、臣多々益々善なるのみ、高祖笑て曰く、多々益々善ならば、何すれぞ我に擒せらるゝ、曰く、陛下兵に將たる能はず、而かも善く將に將たり、此れ乃ち信の陛下に擒せらるゝ所以なり、且つ陛下は所謂天授人力にあらざるなりと、又知言と云ふべきなり、

其二

人の事を爲すや焉んぞ赤手空拳を以て爲すを得んや、乃ち又人の能を見て之に任ずるにあるのみ、古來英傑の士皆人を見るの明なきはなし、豐臣秀吉之を以て加藤福島淺野石田等を用ひ、德川家康亦之を以て江戸幕府を開けり、高祖も亦此長所ありて常に自から矜れり、嘗て群臣と共に自ら羽と比較して、羽は范增を用ふる能はずして亡び、我は蕭何張良韓信を以て天下を得たりと云ひしは、能く自ら知るものにして蕭何の吏才あるを見て以て關中にありて其民を安んじ、其粟を轉運して、數年羽と對峙するの間、嘗て糧食に困むことなからしめ、張良の術數あるを見て之を帷幄の臣として、常に謀議に參せしめ、陳平の奇才を見て諸

將の操縱に任ぜしめ、韓信以下諸將の能を見て、專ら外にありて戰鬪に從はしめ、更に後事を慮かり、曹參陳平周勃を以て相となさしむ、其世にあるの時既に各其能を以て天下を定め其身死ずるの後劉氏一たび危うきに當り、之を安んじたる者は即ち周勃にして、高祖の見る所些の誤あらざりき、

其三

北條早雲人をして兵書を講ぜしむ、曰く、夫主將之法、務擧英雄之心、早雲之を遮りて曰、止めよ我既に之を得たりと、蓋し人心を收攬するは是れ大業をなすの第一義にして、縱令能く見るの明將に將たるの幹ありとも、能く其心を服するにあらざれば以て英雄を駕馭し、天下を一統すること能はざるなり、高祖の人心を得るの深き、我家康の深きに及ばざるが如しと雖ども、猛將謀士各其用を爲すを喜びたるを見れば、必ず又人心を得たるものなくんばあらざるなり、漢、楚、齊鼎立し、中原の鹿漢の手中に落つべきや將た楚にあるべきやは、只齊の向背によりて決せんとするの時に當り、先きに項羽の誠心を披きて韓信に說くあり、後に蒯通の能辯を以てして、人心の變り易き漢王の信賴するに足らざるを說き更に今にして楚を助けて恩を之に負はしむるの可なるを論じ、審かに利害得失を比較するもの縷々數千言なるにも關せず、韓信の智を以てして數日熟慮して終に漢を捨つるを得ず、垓下に項羽を滅ぼして後終に良狗烹られ良弓藏まるの悔ありしもの以て高祖の能く人心を得たりしを知るに足るべし、

其四

高祖能く人言を用ふ、是れ又人に主たるの器なり、高祖の生涯は極めて多艱多難にして、百計殆んど盡き進退維谷まるの時は一再にして止まらざりき、此の如き時高祖の爲す所は、張良陳平等に之を爲すと奈何と問ふにあり、實に「爲之奈何」とは、高祖が常套の語にして、常に此語を以て奇策を待てり、

鴻門の會や高祖實に張良に「今爲奈何」と問ふて虎口を脱するを得、諸將砂中に隅語するや、又良に「爲之奈何」を問ふて諸將の謀叛を未だ發せざるに制するを得、韓信の反するを聞くや、陳平に問ふに「爲之奈何」を以てして之を雲夢に擒するを得たり、其他滎陽に項羽の重圍を脱し白登に單于の鋭鋒を避くるの類、皆此「爲之奈何」の結果にあらざるはなし、蓋し「爲之奈何」とは己れの謀計全く盡き、必ず而の力に依らんとの意にして、問はるゝ者をして半ば其窮厄を憐み、半ば己れの能に誇るの思あらしめ、悅びて其奇計を献ぜしむる所以なり、高祖又自から多少の策なからんや、而かも苟くも自から用ひず、他をして悅びて計略を案出せしむるものは、是れ實に臣下を馭するの道に於て至れるものと云ふべきなり、

高祖能く他の計を用ひしのみならず、又能く人の諫に從へり、始め韓信の異材を知らず、則ち蕭何の言を納れ、禮を厚ふして大將軍に任ず、關中に入り秦の富を見是に居らんとす、乃ち樊噲張良の言を納れ霸上に軍す、高祖久しく巴蜀に止まるに意なし、乃ち張良の言を納れ、蜀の棧道を燒き暫らく羽に東歸の心なきを示

す、高祖韓信の齊を望むを怒る、乃ち張良の計を用ひ之を眞王とす、天下殆んど定まるの後劉敬の言を納れて即日長安に都し叔孫通の言を納れて儀禮を起し陸賈の言を納れて馬上天下を治むべからざるを知りて書を講ぜしむる等數へ來れば毎事他の言に依りたるに非るはなし高祖は能く人言を用ふるの人と云ふべきなり、

其五

人に主たる者は能く大体に通ずるを要す、高祖は實に其人にして、小事に齷齪たるの小丈夫にあらず、故に或は家にありて生産を事とせざるの譏あり、亭長となりては漁色耽酒の嘲ありと雖ども、一たび關中の地に入るや、財物取る所なく、婦女幸する所なかりしが如き、或は暫らく鴻門に屈すと雖ども、捲土重來羽を滎陽に討つや、先づ懷王の喪を發し、諸侯に檄して楚人の王を弑せるものを討つと號す正々の陣堂々の旗、名正しくして事の順なるが如き、或は羽の其父を烹んとするに、答ふるに、冷刻人の骨を刺すの警句を以てして、之を憂ふるの色を顯はさず、而かも飜て羽の十罪を數む、其言辭厲正、羽をして殆んど顏色なからしめたるが如き或は一たび諸將の功を論ずるや、被堅執銳の功を以て次とし、文墨論議の功を以て首としたるが如き、是れ豈に大体に通じて大小の辨に惑はざるものなるなからんや、其他事々人々の言に從ひ殆んど己れに一能なきが如くにして、而かも遂に事を誤らざるもの、其心能く大体に通じ、常に一定の方針に依り、以て人言を取捨するに由るものにして、世の甲に聞きて進み、乙

に聽きて退き、泛々として左支右吾する無定見者と、同日の論ならんや、

高祖の人に勝る所のもの一にして足らず、人若し其一を得ば既に以て名を成すに足る、況んや四五を併せて之を有するに於てをや、高祖の偉人たる所以、漢室幾百年の基を定めたる所以、支那四百餘州上下幾千歳の間偉人を云へば指を先づ此人に屈する所以のものは、實に高祖が此四五を併せ有したるによるなり、而して其中何か最も主たると問はゞ、必ずや大体に通ずるの一事を以て答ふべきなり、夫れ蜩と鷽鳩とは大鵬の水擊三千里を知らず、世の偏聞偏見固陋頑愚小事に明にして大事に暗く、一部の利に走りて全局の失を忘るゝもの能く何事をか成し得んや、高祖幾多の長所を挾むの中胸中既に小大の辨を明かにし、大

体に通じて誤ることなきの一異材あり、此異材あるが故に之を亭長に得ざるも終に漢王に失せず、是を鴻門に失ふも能く垓下に收むるを得たるなり、此異材ありて後始めて人言納るべく、人心收むべく、將た能に任じ、兵を用ふべきなり、高祖の大本領は夫れ誠に此にあり高祖の偉人たるは夫れ誠に此にあり、豈に他あらんや、

附錄

高祖沛に起りてより天下を一統し、漢室の基礎定まりて崩ずるに至るまで、前後數十年の事蹟は、略其梗概を記したれば、今其些事の傳ふに足るべきもの三四を左に抄出す、

九江王黥布楚に畔き漢に歸す、既に至る漢王方に床に踞し足を洗ふ、布を召し入て見へしむ、布悔い且つ怒り自殺せんと欲す、出でゝ舍に就くに及べば、帳御食飲從官皆漢王の居の如し、又大に喜び望に過ぐ、

魏無智嘗て陳兵を薦む、高祖由て參乘とし兼ねて護軍を典どらしむ、彭城の敗後陳平を亞將となし、韓王信に屬して廣武に軍せしむ、諸將平の新に寵用せらるゝを悅ばず由て之を讒して曰く平美なること冠玉の如しと雖ども、其中未だ必ずしも有らざる

なり聞く平家に居りて嫂を盗み、出でゝ魏に事へて用ひられず、亡げて楚に歸す、楚に歸して容れられず、又亡げて漢に歸すと、今日大王之を尊官し護軍たらしむ、臣聞く平諸將の金を受け多き者善處を得少き者は悪處を得と平は反覆の亂臣なりと、漢王之を疑ひ、魏無知を讓む、無知曰く臣が言ふ所のものは能なり、陛下の問ふ所のものは行なり、今尾生孝己の行ありとも勝敗の數に益なくんば、陛下何の暇か之を用ひんや、楚漢相拒ぐ臣奇謀の士を進む、其計誠に以て國家に利するに足るを顧ふのみ、嫂を盗み金を受くるとも、又何ぞ疑ふに足らんや、漢王平を召し讓て曰く、先生魏に事へて中らず、遂に楚に事へて而して去る、今又吾に從ふて游ぶ信ある者固に心多き乎、平曰く臣魏王に事ふ、魏王臣が說を用ゆる能はず、故に去て項王に事ふ、項王人を信ずる能はず、

其任愛する所は諸項に非れば即ち妻の昆弟なり奇士ありと雖ども用ふる能はず、平故に楚を去り、漢王の能く人を用ふるを聞き故に大王に歸せり、臣等身にして來る金を受けざれば以て資と爲すなし誠に臣が計畫采るべきあらば願みて大王之を用ひよ用ふべき無からしめば金具に在り請ふ封して官に輸し骸骨を請ふを得んと漢王謝して厚賜し拜して護軍中尉と爲し、盡く諸將を護す、諸將乃ち敢て復た言はず、

高祖既に天下を平定して數年なり、五日必らず太公に朝して欠くことなく、朝すれば家人父子の禮を執り、敢て舊と異ることなし、太公の家令太公に說て曰く、天二日なく、土に二王無し、今は高祖子と雖ども人主なり、太公父と雖も人臣なり、奈何ぞ人主をして人臣を拜せしむべけん、此の如ならば則ち威重行はれずと、異

日高祖又朝するや太公筆を擁して門に迎へ、却行す、高祖大に驚き駕を下り太公を扶けて堂に上る、太公曰く、帝は人主なり、奈何んぞ我を以て天下の法を亂らんと、高祖乃ち太公を尊びて太上皇となす而して心に家令の言を悅び之に金五百斤を賜ふ、

未央宮新に成り、高祖宴を群臣に賜ふ、席間に高祖玉巵を奉じて起ち、太上皇の壽を爲し笑て曰く、始め大人常に臣を以て生産を治むること、仲か力むるに如かず以て賴むべからずとなせり今臣の業の就る所仲か力の多なると就れぞやと、殿上の群臣皆萬歲を呼び大に笑て樂を爲す、

韓信斬に臨み蒯通云々の語あり、後高祖蒯通を捕へ親しく問ふて曰く、若淮陰侯に反を敎へたりや、對へて曰く然り臣固より之を敎ゆ、豎子臣の策を用ひず、故に自から夷せらる、若し彼豎子臣

の計を用ひなば陛下安んぞ得て之を夷せん乎、高祖怒て曰く之を烹よと通曰く嗟乎冤なる哉烹らるゝや、高祖曰く若韓信に敎へて反せしむ、何の冤かあらん對て曰く秦の綱絕え、維弛るむや山東大に擾れ、異姓竝び起り英俊烏集秦其鹿を失ふて天下共に之を逐ふ是に於て高材疾足の者先つ之を得たるなり、跖の狗は堯に吠ゆ、堯は不仁に非ず、狗固より其主に非ざるに吠ゆるのみ是の時に當り臣唯だ獨り韓信を知て陛下を知らざるなり、且つ天下精を銳にし、鋒を持し、陛下の爲す所を爲さんと欲する者甚だ多し、顧ふに力能はざるのみ、又盡く之を烹るべけんや、と高祖の曰く、之を置けと、乃ち通の罪を釋す、

項羽の將に季布の弟丁公なる者あり、嘗て逐ふて高祖を彭城の西に窘め短兵を以て接すること甚だ急なり、高祖顧みて曰く兩

賢豈に相厄せん哉と丁公乃ち還る天下定まるの後丁公來り謁す、其心窃に封侯を期するなり、帝之を捕へ以て軍中に徇へて曰く丁公臣と爲りて不忠なり、項王をして天下を失はしむと遂に之を斬る、曰く、後の人臣たる者をして丁公に效ふことなからしむるなりと、

高祖黥布を會甄に擊ちて還り、途次沛邑を過ぐ、則ち沛宮に置酒し悉く故人父老子弟を召して縱飲す、時に沛中の兒を發し百二十人を得て歌謠して樂を助けしめ、酒酣なるとき高祖筑を擊ち自から詩歌を爲て曰く、

大風起兮雲飛揚
威加海内兮歸故鄉
安得猛士兮守四方

則ち兒をして皆之を和習せしめ、又自ら起ちて舞ふ、嗟乎悲風慘雨他鄉に在ること十幾年、功業漸く成り、威海内に加はりて故鄉に歸れば沛の山舊に依りて翠に、水舊に依りて青きも、父老幾人か其數を缺き共に嬉戲したりし垂髫年皆老ひぬ、今玉冠黃袍の身も懷古すれば、泗水の亭中日月奈何に長かりしぞ、王媼の醉武負の醒這般の消息今將た焉にか尋ん、玆に今昔を俯仰すれば、慷慨懷を傷ましめて自ら堪ず涙下ること數行なり、則ち沛の父兄に謂て曰く游子は故鄉を悲むと聞く、吾關中に都すと雖ども、萬歲の後吾魂魄猶ほ沛を思ふて樂まん、且つ朕沛公より起り暴逆を誅し、遂に天下を有てり、故に沛を以て朕が湯沐の邑となして其民を復し、世々與かる所あるなからしめんと、沛の父兄諸母故人の高祖を見ること、猶ほ游子の名を成して鄉に歸りたるを見る

が如く、亦太だ畏憚せず、日に相會し、樂飲驩を極め、舊故を談じて笑樂するもの十餘日高祖亦其樂の融々たるを愛し殆んど還るを忘る、乃ち去らんと欲す、父兄固く留まらんことを請ふ、高祖曰く吾今人衆多し父兄の爲に淹留するを得ずと仍て愛を割きて去る、沛中の人縣を空ふして之を送り、邑の西に至り牛酒を献ず、高祖其厚意を悅び、復た留まり帷帳を張りて飲むこと三日、上沛の父兄皆頓首して曰く、沛は幸に復せらるゝを得たり、而して豊は未だ復せず、唯だ願はくは陛下仁慈之を哀憐せよと、高祖の曰く、豊は吾の生長する所なり、吾焉んぞ是を忘れんや、吾特に雍齒を封じたるの故を以て、吾意に反して之を魏に付したるのみと、父兄又固く之を請ふこと再三、乃ち其乞を容れ豊を復することと沛と同ふし、更に沛侯劉濞を拜して吳王となす

天下全く定まりて後高祖曰く秦始皇帝楚陰王陳涉魏安釐王齊湣王趙悼襄王皆絶えて後なし、是れ太だ悼惜すべきなり、守冢に各々十家を予へ、秦皇帝には特に二十家、又魏公子無忌には五家を予へ其冢をして或は荒廢せしむる勿れと。

漢は二百二十餘年にして滅び後漢の光武帝之に代はり後漢滅びて後曹操司馬懿等順次に雄を稱して天下久しく定まらざりき其後東晉の時後趙の石勒帝を稱し、勢甚だ熾なり、嘗て大に群臣を饗し問て曰く、朕古の何王にか方ふべき、或曰く漢高よりも過ぎたりと、勒笑て曰く、人豈に自ら知らざらんや、卿が言太だ過ぎたり、若し高帝に遇はゞ當に北面して之に事へ、韓彭と肩を比

すべきのみ、若光武に遇はゞ當に中原に並び驅すべし。未だ鹿の誰が手に落つるを知ざるなり。大丈夫の事を行ふ當に磊磊落落日月の皎然たるが如くなるべし、終に曹孟德司馬仲達が人の孤兒寡婦を欺きて狐媚して以て天下を取るに效はざるなりと英雄英雄を識ること謂ふべきなり、

世界歴史譚

毎月一回發行
毎編著名文學大家執筆
毎編著名和洋畫伯挿畫

定價

全部　二拾四冊　前金拾參錢
壹冊　前金七拾錢
六冊　前金壹圓卅錢
十二冊　前金壹圓卅錢
廿四冊　前金貳圓五十錢
郵税　壹冊四錢

洋裝菊版紙數百三十頁

明治三十二年十月三日印刷
明治三十二年十月十六日發行

湧高祖
定價　金拾參錢

著者　三浦菊太郎
發行者　大橋新太郎　東京日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　水谷景長　東京本郷區丸山福山町六番地
印刷所　合資會社博進社工場　東京小石川區久堅町百八番地

著作權所有

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館
電話番號（商店用）本局三〇三番　（編輯用）本局一〇一八番

世界歴史譚

麻訶末の批評

▲萬朝報評……天國は刀劍の影に在りと叫破し、垂示たる亞列比亞の聖者麻訶末は、抑も如何の人物なるぞ。砂は熔る許りに燒け、丘陵所々に起伏し、椰子樹鬱として繁茂する沙漠國の宗教は自ら猶太、印度、支那諸邦の宗教と異らざるを得ず。一面より窺はんか、麻訶末は大奸物なり。更に他の一面より仰がんか、麻訶末は大豫言者なり。堀が傳教二十餘年の生涯は、血風慘たり、矢石紛たり。衆、朧して偶像を拜するの時、一旦の靈覺に起ちて、猛然惟一神を說く。眞理を見て、星馳雷突、死も厭はざるの大雄に非ずんば、焉そ如斯くなるを得ん。著者坂本氏の此巨篇を描くや、先づ其國土、習俗よりして、主人公の前半生、及び布教の後半世を概叙し、遂に、教理の大体と、教徒の鬨爭糾亂を叙る。前半は、是れ日白く風和げる沙漠場なり。坦々として、唯遠征商隊の振鈴を聽く。麻訶末も四十以前にありては、一個の市人たるに過ぎざりければ也。後半は、是れ熱沙驚き旋颪倒まに立つの沙漠なり。四十以後の麻訶末は、天地の威嚴も屈す可らざる偉聖なりければ也。這般抑揚曲折の脚色に富む教祖の傳記は、著者に假すに、充分の紙幅を以てせざる可らず。菊版百五十頁に足らざる小冊子は、片影を髣髴し得ば足れりとせん。著者の叙事文章は、煉練の跡歴々として指點すべし。成功せる歴史譚なり。

文學士高山林次郎君著

第壹編 再版 **釋迦** 全壹冊

▲史學界評……佛教の開祖釋迦は實に婆羅門に反對して起れる革新者なり、彼が如何なる手段により此革新を斷行し、一宗教を開きしか、換言すれば彼の事蹟は如何に演せられしかを少年子弟に知らしむるは教育上頗る有益なるとならん、本書は高山文學士が彼の嚴めしき考證によらず、專ら在來の傳說に基き趣味津々たる此偉人の傳記を編せられたる者にして、叙事極めて簡明に、文章詩趣に富み、且つ有名なる畫家下村觀山の密畫を挿入しあれば、少年學生に釋迦の眞精神を會得せしむるには最も適當の冊子ならん

下村觀山君挿畫

文學士吉國藤吉君著

第貳編 再版 **孔子** 全壹冊

▲東洋哲學評……春秋戰國の世周室の勢力衰へ、王綱紐を解き、群雄割據し大は小を制し、強は弱を併せ大義名分廢る時に當て絶世の大聖を出ず、之を孔子となす。孔子の幼時、其經歴、其晩年共に吉國文學士の平易なる筆、艷麗なる文章を以て書き出されぬ。先つ當初聖人の父より說き起し、幼時家庭の遊戯を叙し、禮に厚き有樣を述べ、魯國の宰としての孔子、衛、曹、宋、陳、蔡、葉、楚を流涙する孔夫子、魯に歸りて詩、書、禮、易を修め春秋を著作せし有樣及其末路を說けり。終に孔門の七十七人を擧げ、孔子の德化後世に及ぶ所以、其教育法、其文學に及ぼせし功績等を略叙せり。東洋の大偉人、世界の大聖人を偉々百三四十頁の内に記述し擧ぬ。本書少年に讀ましめ其未だ定まらざる道義心、流漂する行爲を定め處世の方針を確むるには尤も有益なる朋子と信ず。而も讀むに易き樣振り假名まで付けあれば如何なる人も概畧大聖人の生涯を知るを得ん。此点に於ては注意至れりと云ふべし。

横山大觀君挿畫

世界歴史譚

▲眞宗日報評……帝國大學が學士連の編述に成る世界歴史譚の第六編は阪本文學士が麻訶末なり麻訶末が一生の最も壯快なる歴史譚には蓋し興味多きものゝ一なるべし其著少年が讀物としては文章些か硬きに過たるが如しさはれまづ一市人麻訶末より說起して其教義に及ぶ稍完を得たり從來わか少年の氣に釋尊耶蘇を知るも麻訶末が一生か全く知らざるが多ければ此書が少年に與ふべき利益は蓋し比較饒多なるべし(ふせん)

▲新大和評……之れ世界歴史譚の第六編とし博文館が梓に上ぼしたる者宗教界の明星として佛耶兩教と對峙する麻訶末の一生文章流麗にして記事簡潔讀んで利を受くべき者は獨り宗教家に留まらざるべし

文學士上田敏君著

第三編 再版 **耶蘇** 全壹冊

▲史學界評……著者の小序に曰く「著者は家庭に於て、教育に於て、又其生平に於て基督教徒にあらず、此故に教義に暗く、性情に通せざる筆路、終に斯教の精神を逸せしことを恐る」又曰く「著者はかくて其智識の零碎なると、年少未だ宗教の幽玄を語るに足らざるとを思ひて、批判を試みず、眞僞を斷せず、唯に教祖に關する傳說を抄記せしのみ」と、然れども(一)緒論(二)降生及少壯(三)傳教及迫害(四)受難及復活を叙するに當り、全編を通じ確たる史的根據に徴して筆を執られたれば、善く四界萬世の師表たりし大天才基督の事蹟は聖書以外此書により始めて我國民に紹介せらるゝを得べき空前の好著なるべし

中村不折君畫

法學士笹川潔君著

第四編 **比斯麥** 全壹冊

▲史學界評……笹川法學士の著なり、章を分て、略歴、鐵血政略、國家社會主義、及比公論となし、小人と大人との中間を採りて簡明に說述せり挿畫數葉は象堂氏一機軸を試みたる跡歴然たり。

▲國民新聞評……笹川法學士の著なり、章を分て、略歴、鐵血政略、國家社會主義、及比公論となし、小人と大人との中間を採りて簡明に說述せり挿畫數葉は象堂氏一機軸を試みたる跡歴然たり。

▲横濱貿易新聞評……笹川法學士が鐵血宰相の一代經歴を略叙したるもの行文簡にして語弊少なく少年淸窓の友として尤も適當なる材料なるを信ず。

小坂象堂君畫

世界歴史譚

▲新北陸評……弘法傳道容易の業にあらず、況んや教を創立して之を流布せんとするに於てなや、而かも劍戟によりて教義を施き衆生を濟度して萬世の基を開きたるものに至りては予れ唯之を回々教の祖師ムハメットに於て之を見る、釋迦や基督や其教法を弘むるに於て艱難苦行を積みたるもの、而かも彼等は慈悲忍辱によりて其目的を遂したり、ムハメットの如きに至りては寧ろ異例といはざるべからず、是れ彼が稀世の一偉人として稱ぜらるゝ所以にして抑又宗教家として非難なき能ざる所以なり、此著彼一代を簡明に叙述せるもの、亦以て其中面を窺ふに足るべき也

▲鳥取新報評……文學士坂本蠡舟氏が回々教の教祖たるマホメットの偉人たるを少年に紹介せるものなり

▲東京朝日新聞評……世界歴史譚第五編として出づ西洋紀元二百五十年より二百年に至れる間阿弗利加海岸に國したるカルタージに不世出の英傑あり西班牙に渡りアルペンの險を越て羅馬に迫り羅馬をして大に震駭せしめたるも不幸最後の戰爭に失敗して和を講じ國に歸りて政治を執り再び羅馬と雌雄を決せんとしたるも奸臣威子のため國を去るの止むを得ざるに至り尋で其國滅亡したる事を叙すハンニバルの人となり此篇に於て詳悉せり

文學士大町芳衛君著

第五編 漢尼拔（ハンニバル） 全壹冊

文學士坂本 健君著

第六編 麻訶末（マホメット） 全壹冊

左手に經典を捧げて天神の福音を傳へ、右手に利劍を提げて攻伐の偉業を成し、百戰以て一宗の教祖と仰がれ、稀代の偉人と稱せられし、千古の傑物マホメットの面目は。今坂本文學士の筆端を以て縱横寫出せられぬ讀來れば英雄實に是れ神仙の觀あるべし

目次

第一亞剌比亞國○第二市人麻訶末○第三ヘラの洞宏○第四默加の豫言者○第五豫言者の市○第六アブソフ井アン○第七教國○第八入滅○第九神蹟○第十人と教○第十一餘光

北蓮藏君著

世界歴史譚

▲横濱貿易新聞評……世界歴史譚第六編として阿剌比亞の豫言者回々教祖マハメットの略傳を叙したるもの著者は文學士坂本蠡舟子、行文平易にして筆勢健滑讀み了りて趣味愈深し

▲馬關毎日新聞評……是れ右手に劍を携さへ、左手にコーランを携へて亞拉比亞の大漠を横行濶歩したる回教の教祖マホメットの一代を、簡潔にして清健なる筆を叙述したるものなり、夫れ回教は佛教基督教と相鼎立して世界の三大宗教と稱呼せらるゝもと、而して其教祖が傳道する行跡は皆共に一部の小說とするに足る趣味ありと雖も、就中最も其確信が博播する上に於て趣味を感するは、本書の主人公則ちマホメットの生涯なり、僅々たる百四十頁の小册子未だ此猛烈熱誠なる豫言者を充分に傳ふるは固より能はざる所なれど、その人物性行の一斑は之によりて窺知するを得べし。

▲九州日々新聞評……此れ世界歴史譚の第六編としで文學士坂本蠡舟氏の筆になりて顯はれたるもの叙事明快にして文章亦た流麗一ひ卷を披らげば宗教界の一偉人マホメットが左手には經典を捧げて天神の福音を傳へ右手には利劍を提げて滿民の苦惱を救ひて一宗の教祖と仰かれ百戰の英傑と稱せられし一代の事歴は躍如として眼前に映し來る今日歴史を探究して千古の偉人を憶ふの時實に少年學生の家庭に於ける必讀の好書なり

續刊目次

第文 文學士三浦菊太郎著

第七編 漢高祖 全壹冊 北蓮藏 挿繪

第文 文學士笹川 種郎著

第八編 岳飛 全壹冊 渡部金秋 挿繪

第文 文學士熊谷 五郎著

第九編 フランクリン 全壹冊 水野年方 挿繪

第法 法學士島田文之助著

第拾編 ルソン 全壹冊 北蓮藏 挿繪

第法 法學士谷野 格著

第拾壹編 カビテンクック 全壹冊 畫未定

第法 法學士桐生 政治著

第拾貳編 閣龍（コロンブス） 全壹冊 畫未定

第法 法學士岸崎 昌著

第拾參編 俄拔兒（ガルバルシー） 全壹冊 畫未定

第法 法學士森山 守治著

第拾四編 ジヤンダーク 全壹冊 畫未定

第法 法學士佐藤 信安著

第拾五編 彼得大帝（ペートル） 全壹冊 畫未定

第文 文學士北町 香隅著

第拾六編 ソクラテス（ソ） 全壹冊 畫未定

第拾七編以下目次は追て掲載す皆著名學士の執筆なり

大和田建樹君著

日本大文學史

全五冊‖洋裝菊判紙數一冊三百餘頁美本

目次

●卷の壹‖總論紀元前後三韓交通以後　藤原奈良朝時代

●卷の貳‖延喜天曆源氏物語時代の文學

●卷の參‖鎌倉時代及足利時代の文學

卷の三 目次

▲鎌倉時代●概況●當期の言語文章●謠物と語物●軍物語と他の散文●漢文類似の和文●和歌の狀態●著名の作者●散文の作例●謠文の作例●足利時代概況●言文の親睦●當期の名作●和歌の狀態●歌謠の進步●謠曲の成立●滑稽の文學●著名の作者●散文の作例●歌文の作例

●卷の四　近世及今代文學

●卷の五　文學年表、牽引文學史評釋

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

〔正價壹冊金四拾錢郵稅八錢〕

五冊前金壹圓八拾錢

84
22

博文館四大雜誌定價表

太陽

毎月二回　五日　廿日　發行

▲壹冊(三百頁以上)……金拾七錢
▲六冊(三ヶ月分)……前金九拾八錢
▲拾貳冊(半ヶ年分)……前金壹圓九拾錢
▲廿四冊(一ヶ年分)……前金參圓七拾錢
▲郵稅一冊三錢……●廿四冊郵稅金七拾二錢
▲定價郵稅共(壹ヶ年分)……前金四圓四拾二錢

毎號寫眞銅版口繪廿頁挿入

九月

發兌期日

太陽　第八拾號……五日發行　第廿壹號……廿日發行

中學世界　第十九號……十日發行　第廿壹號……廿五日發行

臨時增刊　少年世界　第十九號……一日發行　第貳拾號……十五日發行

文藝倶樂部　第十貳編……一日發行

中學世界　第貳拾號　明治青年文壇　秋の卷……廿日發行

注文規定

●御注文ハ一切前金ノ規定ニ付必ズ御送金ノコト●前金相切レタル許ハ直チニ送本ヲ止ム●郵便爲替ハ「東京郵便本局」渡リニテ御振込ノコト●郵券代用ハ一割增●四雜誌一ヶ年分宛合セ御注文ノ方ハ「博文館々友」トシ爾來本館宛御注文ハ五ヶ年間一割引トナスヘシ

中學世界

毎月二回　十日　廿五日　發行

▲壹冊(百貳拾頁以上)……金八錢
▲七冊(三ヶ月分)……前金五拾四錢
▲拾四冊(半ヶ年分)……前金壹圓
▲廿八冊(壹ヶ年分)……前金壹圓九拾錢
▲郵稅壹冊壹錢五厘……●廿八冊郵稅金四拾二錢
▲定價郵稅共(壹ヶ年分)……前金貳圓參拾貳錢

毎號寫眞銅版口繪四頁挿入　年四回增刊

文藝倶樂部

毎月壹回一日發行

▲壹冊(二百七拾頁以上)……金拾五錢
▲三冊(三ヶ月分)……前金拾七錢
▲六冊(半ヶ年分)……前金九拾八錢
▲拾貳冊(一ヶ年分)……前金壹圓四拾錢
▲臨時增刊(年四回發行)壹冊七錢(郵稅二錢共)……前金貳圓四拾五錢
▲郵稅壹冊(增刊)二錢五厘……●十六冊郵稅四拾錢
▲定價郵稅共(壹ヶ年分)……前金貳圓九拾錢

毎編寫眞版木版彩色畫挿入　年四回增刊

少年世界

毎月二回　一日　十五日　發行

▲壹冊(百四頁以上)……金三拾六錢
▲六冊(三ヶ月分)……前金六拾五錢
▲拾貳冊(半ヶ年分)……前金壹圓三拾七錢
▲廿四冊(一ヶ年分)……前金壹圓五拾錢
▲臨時增刊(年二回發行)壹冊金拾貳錢(郵稅二錢共)……前金壹圓五拾錢
▲廿六冊增刊……●廿六冊郵稅金二拾八錢
▲郵稅一冊二錢……●廿四冊郵稅金二拾錢
▲定價郵稅共(壹ヶ年分)……前金壹圓七拾八錢

毎號寫眞銅版口繪四頁挿入　年二回增刊

第參十參編

法學士田中次郎著

日本帝國憲法論

教育時評論……憲法の沿革解釋より、國家觀念を論じ、歐州憲法と精神を異にする所以を詳記し、解疑問題十數件を決解し、又臣民の權利義務、帝國議會、國務大臣、司法、會計、皇室典範に至るまで、盡く批判を加へたり、帝國臣民の必ず一讀すべき、近來の好著なり。

（全一冊）

上製 五錢 郵稅 十錢 並製 十錢 郵稅 五錢

第參十四編

文學士高山林次郎著

近世美學

本書は斯學に精博たる高山文學士の新著にして近世英佛二國の美學を紹介したるものなり文辭明暢にして理義透徹讀者は是に依りて容易に歐洲美學の歴史並に最近世の學說を會得するを得べし殊に所載の學說は一國一派に偏せざるを以て實に文學美術の士を益するのみにあらず斯學研究の學者にも不可缺の書なり。

（全壹冊）

上製 五錢 郵稅 十錢 並製 十錢 郵稅 五錢

帝國百科全書

旬月二回發行 菊判三百廿頁

第參拾參編

幸田露伴君著

伊能忠敬

全壹冊 正價拾參錢郵稅四錢

身、商賈に生れて、天資深く算數の學を好み鎖國の關門茲に開けんとする維新前に際し感ずる所ありて海岸測量に心血を濺ぎ、外人をして其製圖の精巧なるに驚かしめし伊能忠敬は茲に幸田露伴君が高邁奇拔の思想に依て描出せられ丸山山頭屹立の銅碑と共に遺個偉人の面目千歲不磨の義を傳ふべし。

富岡永洗挿畫　八月出版

第拾四編

文學士武島羽衣君著

新井白石

全壹冊 正價拾參錢郵稅四錢

先生少より力を儀漢古今の典故に肆にし慨然天下を以て自任の志あり、而して身を清明の世に際して其蘊蓄を施す、聲名朝野に轟き風後業に稱せらる、眞に千載一遇と謂ふべし、今ま先生の神采風丰紙上に活動す。

山田敬中挿畫　九月出版

少年讀本

旬月一回發行 菊判百三十頁

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

84
22
Ⓜ

007584−000−9

84−22

漢高祖

三浦　菊太郎／著

M32
ACL−0037